1985

大正十三年一月二十九日第三種郵便物認可
大正十五年四月一日發行（毎月一回一日發行）

京城雜筆

永樂町人 編輯

四月號

【第八十六號】

お酒を
毎日
適當に
第一流の
ものを
サクラ正宗
宮内省
御用達
山邑酒造株式會社

キリンビール

株式會社明治屋發賣

キリン果ビール

四大特長!!
風味の良い!
芳香の良い!!
色澤の良い!!
きゝの良い!

最上醤油

ウユーコツキ

みやこ味噌本舗
嶋屋醤油部
營業所
京城天奉
若岡城
松崎町
町
京城北
米倉
町町

鈴木商店

京城支店

樂器と蓄音器

獨乙高級ピアノ
山葉ピアノ、オルガン
鈴木製
ヴアイオリン、マンドリン
獨乙製
ウアイオリン、マンドリン
內外管樂器一切
內外蓄音器
內外レコード（日蓄、日東、內外ウィンナー）
內外音樂書
樂器附屬品一切
運動具一式
（目錄無料進呈）

京城本町二丁目二十九

釘本洋樂器店

電話一二八三番

南山莊

市內西四軒町

電話本局 一五一三 三五八五番

既製品が澤山あります

春向背廣服

バーオ

トーコンイレ

新地質續々到着い
たしました
仕立は念入り價格
は安い

京城鍾路一ノ一九

角田洋服店

電話光化門九五五番
振替京城一八四三番

御注文で特製致します

四月號目次

（原稿は大體到着順に出る）

飢……京城醫學專門學校　飯島滋次郎氏
無線たより……殖銀東京支店　中島司氏
刑事被告人となりし思ひ出……辯護士　山口均四郎氏
碁……朝鮮警察新聞社　石川一水氏
春日讃頌……大阪朝日京城支局　井上收氏
足を洗つた人の話……總督府鐵道局　鉏鹿曉太郎氏
幕末の商傑……三越京城支店　尾山藤二氏
路上の出來事……本町しらぎや　安達清太郎氏
診察所餘興……瀬戸病院　瀬戸潔氏
對局秘訣……東京、將棋八段　金易次郎氏
或日の强盜と私……今本醫院　今本義胤氏
未知の知人……遞信局　本堂貞一氏
夢……東拓京城支店　松本光氏
兒を抱く人々……元町小學校　片岡喜三郎氏
自家廣告……辯護士　高橋章之助氏
或日の安南王……今村鞆氏
岐路……一番ヶ瀬醫院　一番ヶ瀬慶次郎氏
白衣考……總督府囑託　松田學鶴氏
續判決餘錄……京城覆審法院　伊藤憲郎氏
山陰飛脚旅行……橋本豐太郎氏
朝鮮で見た東京女……京城日日新聞社　森次郎氏
連翹さくころ……京城日報社　角田廣司氏
京城つれつれ草……殖產銀行　守屋德夫氏
黃海道廻り……朝鮮鐵道　伊藤利三郎氏
紅雀……殖產銀行　金谷要作氏
客舍漫筆……京城女子技藝學校　飯泉幹太氏
死の問題……朝鮮公論社　井上要二氏
自畫自讃天下名文……木浦　石森久彌氏
續わが體內の虫……久原鑛業京城支店　福田有造氏
ブルドッグ……東拓裡里支店　小瀧元司氏
湖南雜記……殖產銀行　佐々木久松氏
松吹く風……平山牧場　森悟一氏
人生……廣江澤次郎氏
頑悶雜筆……永樂町人　平山政十氏
春興……

飢

飯島滋次郎

海のそばの停車場、日暮、埠頭には黒い大きな汽船が繫づけになつてゐる。が船員の姿は見えない、待合室に若い男が二人窓に倚つて海を眺めてゐる。ベンチに若い女が赤子に乳を啣ませてゐる。

若い男　あゝ待遠しいな、船は何時に出るんだ、海でも荒れてゐるのかい。

伴れの男　なにすこしぐらい、風が吹たつて大丈夫さ、あの船をさつき洗つてゐたらう、掃除してから俺達を乘せるのだ

若い男　それならいゝが俺の懷中は海を越すのがやつとなんだから、獨りなら野宿でもするが女房子供を抱えてゐるんだからな。

伴れの男　心配するな、船があの岬を曲ればこつちのものさ、風が吹いたつて、めつたに引返さないんだ。

若い男　……でもなんだ、瘠士をいくら耕したつて、腹一杯飯が食えないから、彼處へ行くものゝ先祖の墓を棄てるのは名殘り惜しいな。

伴れの男　涙なんか流して、まだそんな餘裕があるのか、そんな足枷は斷ちまへ！先祖だつて、こんな瘠士は逃げやうとしたんだが、鋤を休めれば飢死するから、あがき、もがきながら地面に縛られて死んでいつたんだ、ぐず〳〵してゐると俺達も足腰が立たなくなる、そうなつてから山の素てつぺんに立つて泣いたつて駄目だぜ。

（あたりを揺がせる、汽笛の聲、高く鳴る）

さ、船が出るぞ、もう少しの辛抱だ、俺達が船に乘ると陸に繫いだ、大綱がする〳〵と解ける。そうすれば俺達の心もさつぱり古着でも棄てるやうに此處と別れて彼方に行くんだ。

女　……でも彼方へ行つたらどんな樂な暮しが出來ませう。

伴れの男　どんな生活つて、あの崖の松を見なさい、ひよろひよろと岩に死囓みついて、やつと生きてる、が彼方ぢや松も青くて大きくて、天の柱みたいだ、人間もそうだ、彼方へ行けば麥でも米でも魚にしろ、其處を目がけて集るので五色の火華やうな生活が飛散つてゐるし、夜になつても眩しいぐらい明るい往來に血色のいゝ男や女が渦卷いてゐる眞白い米でもパンでも食へるんだ、俺達もそんな處で舌が脂で爛れるまで肉を食つて人混みに押されて汗をかいてみたいのだ、手拭でも絞るやうに緊乎と手に握れる幸福つてそんなものだろう。

若い男　こんな豆かす辨當が嫌になつた、早く船の鐘が鳴ればいゝがな。

（鋭く鳴きながら鷗一羽海の方から飛んでくる）

よしこんなものくれてやら。

女　そんな處ならいゝが私はまだ知らない土地に行くのが心配ですよ、此處なら豆から粟と植えるものが定つてゐて、それを順々に刈つて、飢じいながら我慢してゐますが彼方で仕事があるかしら。

伴れの男　なに仕事が無いなんてあるものか、百足蟲の足のやうに仕事が擴がつてゐるんだ豆畑歩いてるうちに十も二十も殖えてゆくんだ、あゝ鐘が鳴る！

（銅羅が響くと棧橋を踏む群集の足音は力强さは山を下る溶岩のやうである。物凄さは運命の歩みのやうである。巡査が行列を制御しやうとしたがたちまち絶望的に兩手をあげると人浪にのまれてしまふ）

さ、早く俺達もこの潮に乘らなきあだめだぞ、着いたら眞先に陸に飛上るんだ！。

（男は女をうながすと不安の顏に希望の眼を輝かして必死になつて群集をめがけて突進する）

伴れの男　涙なんか流して、まだ
　そんな餘裕があるのか、そん

五色の火華やうな生活が飛散
ってゐるし、夜になつても眩

になつて群集をめがけて突進
する）

京城雜筆

無線便り

東京にて　中島　司

誰れやらが、今大流行はラヂオにキネマと何とやらと言つたさうだ。それには無條件で同感だ。

來て見れば、此の東京のラヂオ熱は大したものだ。それはあながち流行とか『熱』とか言ふべきでなく、今や家庭的に是非あつて欲しいものの一つとなつて居る。尤も、十圓二十圓で取り付け設備ができて、月に一圓の聽取料を拂へばよいのである。實に簡便な、やすいものだ。それにしては、有線電話の民衆的不如意さが癪にさわるではあるまいか。

げに東京はラヂオの都となりにけり。試みに高架鐵道は省線電車の窓から眺め見渡せば、滿目是れアンテナの竹竿の林だ。必ずしも竹竿とは限らないが、打ち見たところ竹竿の林立だ。昔は、草より出でて草に入ると詠まれし武藏野の月、今は竿より出でて竿に入る竿の都とぞ申し侍るべきか、まことや漫畫味たつぷりな都の空、現代文化の中心都市、それが此の東京ではある。

一昨年と言へば大正十三年の秋に來た頃は、かいもく見えなかつたのに、僅か一年ばかりの間に、大したものだ、東京放送局の加入者が、たしか十九萬に及ぶとは、これぞまことに電光石火の進歩と申すべきであらう。

昔なじみの品川は御殿山に小やかながら自樂草舍を構へ、まだ京城からのガラクタ家財の置き場さへ安定しないのに、ラヂオを引くのが電氣や瓦斯同樣に必然であるかの如く、何にも知らぬ子供等をそゝのかして、親戚の青年が小生の否應もあらばこそ、すつかりラヂオの設備をして行つた。さあその晩から『ゼー、オー、エー、ケー』だ。レシーバーは子供等によつて引つぱり風だ。夕倉なかばに喧嘩がはじまる、それを制止するいやはや大變な騒ぎで、此のおやぢの煩はしさ、一通りではない。ちやうど晩の六時頃、食事の時間が童話の放送があるので、子供等がソラ來たと箸を投げすてゝきゝ耳あてる。とんだ厄介な『ゼー、オー、エー、ケー』をしよいこんだものだ。

とは言ふものの、その實ラヂオは決して不結構なものではない。かく申す小生なども、失禮ながら炬燵にねそべり、何々博士の御講演、何々師匠の御演藝を、神韻縹渺の裡に拜聽ができるといふ譯。月に一圓の料金は一日にして三錢三厘三毛に當り、聞いても聞かないでも、何とおやすい勘定ではあるまいか。有線電話一回の通話料が度數制で金三錢だ。とても比較にはならぬ。

朝は九時すぎから『ゼー、オー、エー、ケー』だ。夜は大てい九時半頃まで『ゼー、オー、エー、ケー』だ。うちの山の神が手拭をかぶつたまゝ帶の手を休めて家庭講座なんどに聞き入つて居る間に、『今日は』の御用聞きさんが手もち無沙汰に閑却されて居る始末だ夜に入りて、子供衆の時間がすむと、英文學講座、趣味講座、演藝放送と、隱接に遑なく、その賑やかなこと、お蔭で小生此の頃は大事な讀書の時間をつい我れ知らず犧牲にしてしまふ。

先夜たまたま丸山鶴吉さんの、『新附同胞を敬愛せよ』と題する放送を耳にした。私はあの丸山さんのテラ々々光るおつむりを聯想しながら、なつかしく傾聽したのであつた。今夜はハアモニカの演奏があるといふので聽くともなしに聞いたところ、それはキヤラバンの曲であつた。此のキヤラバンの曲こそは、曾て朝鮮ホテルのバアで、ヴイクターの高聲蓄音機でおなじみの曲である。私の大好の曲である。それを、はからずも耳にして、私の魂は京城へ飛んだ。そしてホテルのバアに居る氣もちになつてしまつた。

（大正十五年三月六日夜十時半
御殿山の自樂草舍にて）

◈筆のしづく

吉田莊一

齒科の飯塚さんは、ゴルフと來ては、迚も熱心なものである『△△さん、顏色が悪い、どうですゴルフでも初めては……』大抵な人が顏色憔悴ときめられて了ふ『併し斯う齒が痛んでは』『ナニその方は心配は大らん、私がついてるから』先生、この筆法で、スグ生捕と來るのである。

〔三〕

京城雜筆

刑事被告人となりし思ひ出

山口均四郎

僕が中學二年の時、櫻も散つて間もないといふ比であつた、或日學生中の九十六名が突然××地方裁判所豫審判事の令狀で、其筋に拘引された事がある。僕も御多分に洩れなかつた一人であるが、事件の起りといふのは斯うである。其年の四月十三日、學生中の不良分子?が、運動場の一隅に集まつて校長排斥の決議を爲し、其餘勢で約半里北方の櫻馬場といふ所に名殘の花見と出掛けたのである、ところが此處から三四丁北の方に耶蘇教徒の經營にかゝる孤兒院式の農學校なるものがあつて、二三十人の孤兒に普通學を授くる傍農事をやらして居るのがある。僕と同窓のMの二人は毎日この學校の前を通つて中學校に通ふて居つた關係から、見知合の孤兒も二三は居つたのである。其頃耶蘇教徒といへば吾々青年からは譯もなく敵視されて居つたのみならず、この農學校では孤兒の生膽を取つて支那人に賣るのだと、根もない事を言ひ觸らす者もあつたので、僕等は非常に憤慨して該教徒を憎んだものだ。そこで時祈には通學の途中孤兒を擁して、豚呼はりをなし弱者いぢめをやらかした事もあるが、亦一面には生膽を取る場所の構造はどんな風になつて居るのか一遍見度いとの好奇心も手傳つて門番の爺に度々交渉した事もあつたが、快く聞き入れて呉れなかつたものだ。そこで櫻馬場花見の序に、耶蘇學校參觀を發起した所が一同の不良分子共は忽ち相呼應して、ソラ行けと立所に耶蘇學校の門前指して衝き進んだ。けれども參觀希望の申込が容れられなかつたのは勿論で、其腹癒せに群集心理は……常に斯る場合に起るが如く……亂暴狼藉の結果を齎らしたのである。其後被害者が警察に申告した書類によれば、引拔かれた杉苗二年生二百十一本、破壞された硝子障子三十餘枚、講堂に拋げ込まれた小石三百餘個、おまけに十字架上の神像は小便で散々に汚されたとある。この學校は○○市に壯麗な日多數の信徒を有する禮拜堂の所有者某國某教會の附屬事業であつたので、當時の警察はこれは大變だ、國際問題を惹起しはせぬかと頗る神經を病み大騒ぎをし初めたのと、比較的被害が大きかつたのと、も一つ何かの理由で是非共犯人を捜し出し處罰を加へねばならぬと意氣込んだといふ事である。案の如く數日ならずして豫審判事の令狀が中學に舞込んだ譯だ、偖て九十六名の被疑者は定めの日時に學生監の引率の下に土地の區裁判所に出頭した處、××地方裁判所からは豫審判事が出張してゐて、廷丁や書記を指揮して出頭者全員を庭前に並べ、『サークル』を作り帽子を被らした上、この内に手品の種でも入れる樣に豫め呼出してあつた耶蘇學校の孤兒七八名を入れ、『サアお前方が見覺えて居る暴行者を容赦なく引張り出せ』と嚴命したのである……其時の判事の顏の恐ろしかつたこと……僕は帽子を目深かに、兩眼を光らして睨んで見ても駄目、日頃弱者いぢめの天罰覿面、イの一番に引張り出された……それが左右からだから助からない……同窓のMは第二番であつた。孤兒共は得意然と……親の讐でも討つ樣に……次から次と都合八名を物色したのである。此の内三名丈は暴行團に加はらなかつた事は僕も知つて居つたが、三人共獰猛面の持主であつたのが奇禍を招いた原因である。最も可笑しかつたのは一團の主魁K君が初めから令狀の執行さへ受けなかつた一事であつた

僕外七名の犧牲者?は、直ちに被告人といふ難有からぬ名の下に豫審判事の審問を受け、其夕刻から○○監獄に收監されたのであるしかも豫審中とあつて、各自獨房に謹慎の嚴命を受け毎日午前五時から午後十時迄、端然靜座して改悛の意を表せねばならなかつたのは、今日と違つた一種の懲罰であつた事は言ふ迄もない。差入を許さるゝ書籍は、孝子萬吉、二宮尊德、論語孟子の類で、其頃流行の雜誌類は全然受付けては呉れなかつたのだ。尤も食物丈はお上の御厄介にはならなかつたけれども、朝から晩迄座り切りで、うつかり室内をぶら〳〵歩いたり、居睡りでも初め樣ものなら、それこそ大變、いつの間にか窺ひ寄つた看守

や押丁（今の監丁）殿から、恐ろ

の赤毛布に手廻はり道具を包んだ

るのだから明日から坊ちゃんがや

京城雜筆

や押丁（今の監丁）殿から、恐ろしい一喝を喰ふて忽ち原狀に復するので、トテモ腹の空く譯がなく差入辨當も多くは監獄の豚や鷄を肥した事であつたらふと思ふ。後日獰猛面の一人Sから聞く所に依れば、S君は辨當の空箱へ、『早く助けて呉れ』と塵紙に認めて入れて置いたそうだが、先づ爪で以て齒莖を掻き破り其出血を辨當箸を嚙んで拵へた筆？に浸し書いたのだと、得意然と語るのであつた監獄のお役人が辨當の空箱を仔細に檢査するといふ事迄には氣が付かなかつたそうで、辯護士諸氏も苦笑した事がある。兎に角獨房生活の約四十日中には、悲しい事、腹立たしい事、悔しい事續にさはる事が無暗に續出して、今から想ふても能く辛抱が出來たものだと我ながら感心する位である……今日の拘置場生活と比較して見たらよほど面白いと思ふけれども、これは後日に稿を改めて書く事としやう……六月の初頃に約十里南方の○○市の監獄へ移監せらるゝ事になり八名の罪の子は各自差入れの赤毛布に手廻はり道具を包んだものを背負はされ、海上六里を……當時その土地には汽車が全通して居なかつた……百噸位の小蒸汽船に托し、更に陸上三里は人力車を雇ひ○○市に護送されたのであるが、護送の巡査殿丈がドウしても、自分丈は歩くと頑張るので、車夫君も走る譯には行かず、市中の譯を知らぬ人々は、今晩から○○座で小供芝居があると噂したさうである。

○○市の監獄では獨房ではなかつたが八名は各別に分布されて了つた。僕は東の六號室で襟に三七二の札を貼られた樣に訊問する。其日の夕方に看守殿が、『オイ六號室新入だ』と言つて僕を投げ込んだのであるが、室内には先客が五名程鎭座ましまして僕を歡迎したのである。先づ氏名職業年齡を聞かるゝまゝに答へ、犯罪事實の概略を披露に及ぶと、一番末座にあつた鼻の低い四十男……これは賭博の前科十數犯の博徒ださうな……が『こゝは新米が室の掃除から便器の出入迄やる事になつて居るのだから明日から坊ちゃんがやるんだよ』と言ひ聞かすと上座に控へた五十男……これは○○縣知事を謀殺未遂の嫌疑で既に一年近くも未決監に生活するといふ八字髯の風采賤しからぬ紳士であつた、後で聞くと證據不十分で免訴となつたさうである……が『馬鹿!!』と大喝し、『こんな小供に無茶言ふない』と僕に同情を表して呉れたので、其他の連中も『さうだよ全く先生の言ふ通りだ』と賛成し中には『鼻の野郎の厄は當分逃れつコないよ』と冷笑するのであつた。成程鼻の博徒君は僕が這入る迄は最も新米として、掃除から便器の出し入れ……便器は早朝室外に持出して置けば囚人が掃除した分と取替へる仕組になつて居つた……迄一人で背負つて居つたのであろう、翌日からも矢張りせつ〳〵とそんな事を働いて居つた樣であつた（續く）

谷らくさ

日出處樓主人

土塀のつくろひをへぬ高臺のやしきや
しきの花は咲きたり
谷に沿ふみちを上れば花の間の露にぬ
れつゝ啼く小鳥多し
いさゝかの蕾をのこし枝々のさくらは
すでに咲きそろひたり
ぼんぼりの灯影とどかぬ谷底の水のひ
やきも春めけるかな
谷川のみちのうねりにかゝりたる橋の
朱塗りも古めきてよし
ぐるりみな花の春なり一本のさくらも
あらぬ庭はさふしも

◈斷食する人

平田久雄

神田長平さんといふと、憲兵大佐で寺内時代の忠南警務部長をつとめ、大に鳴らしたものだが、今は南山町に閑居し、悠々餘生を樂んでゐる▲若い時から三週間、四週間といふやうな斷食をたび〳〵やつたもので、その方の話となると堂に入つたものだ▲亦た一方では遺傳學を研究し、訪問者でもあると盛んに氣焔をあげる▲この人の變つてゐる所は、二階に自分の書齋があるのに、どんな來客でも必ず家族室に案内し、夫人や子女環視の中で對談するので、初めての訪問者は誰でも面喰つて了ふ。

【K】

圍碁漫話

石川一水

『貴君は大變書がお上手ですから……』

『戯談ぢやありません姓名を書すのにも足りない位で……』

と、謙遜致します。

『當地の謠曲界でも、貴君のノドは既に定評があります、一つ如何です？』

『どう致しまして、私などはホンの尋常一年ですから……』

と之れ亦謙讓自ら居るといふ自重振であります。總して藝術家の客觀的態度は、頗る慇懃なもので、ヨシ內心相當の自負があつても、對外的には容易にその本音を吐かないものであります。唯茲に一つの除外例として碁客——碁打ちなる者が居ます。

高級者や有段者ではナカ〳〵さうも行きませんが碁を知る者の大部分は、二目乃至三目方の自負心を持ち、從つて對敵態度が謙遜どころか、頗る天狗です。

『君二目置き給へ』

『イヤ我輩が白だよ』

初手合や暫く逢はなかつた碁友の間には、ヨク氣持のよいイサカイが起ります。戰はざるに既に一、二目方の勝負は此手合せで解決されて仕舞ふ。

斯樣な自負、斯樣な我儘、斯樣な不遜が碁に限つて我にも人にもさては世間一般にも許され、公然と天狗を名乘り得る處に、碁の妙趣があります。

その兵力三百八十一、その戰場方尺餘、斯樣な小天地でシカモ千變萬化の秘術が實演され、古來未だ嘗て同一棋譜が出來ないし、將來も出來ないであらうとは、代數的計算からしても測定される處ださうです。

玄妙摩訶不可思議な無限の變化が、結局下はヘボ碁から上は名人本因坊に至る無慮幾百萬の碁打を產む所以であり、碁客に驚く可き階級を生ずる所以であります。

藝術に天才的キラメキがある樣に、圍碁の名人上手と言はれる人は大部分天才者であります。慶長の昔京都寂光寺の小僧坊主であつた算砂が、十三歲にして二段格の實力を有し、遂に第一世本因坊となつたなどは全く天才的碁客の尤なるものでありました。

天才的藝術家乃至は職業的藝術家は別に致しまして、碁は或程度迄は誰でも上達し得る藝術だと言ひます。具體的に申せば初段に井目位迄には普通の人が普通の力で達することが出來、井目級に達すれば聊かの努力と研究で五目前後に迄上達しますが、この初段に五目前後といふのが一般嗜好者の止りで、之を境界として技倆が地平線の分岐點となる觀があります。

有段者に取つても五段が一大難關とされて居る如く、笹碁にも初段五目の關門が容易に突破されません。初段五目から格段の研究と努力とを要すること勿論であるが初段二目といふ處で第二の難關に逢着する。天才者ならざる普通の人には、先づ此の初段二目乃至は先といふ處が最後のトメで、之迄に上達すれば笹碁黨の驍將として鼻を高うして可なりでありませう

サテ、どうしたら夫迄に漕ぎ着けるかといふ實際問題になりますと、ナカ〳〵言葉や筆で解說されるものではありません。撞球の本に書いてある通りに突いて見ても思ふ樣に點が採れないのと同樣、教授者の言ふ通りに碁を打つて居ると、却て敗戰に終ることが多いソコが碁や球のデリケートな處であり値打のある處と思ひます。

筆者は素人の碁を如上の如く三段に分けまして、第一段初段井目迄は實習時代、第二段五目迄を研究時代、第三段二目迄を努力時代と分類して大體の間違がないと存じます。即ち第一段時代には、出來る丈け數多く打つ、そして種々な狀況、境遇に逢着する。ト何時の間にか上達して居る。勿論碁經を讀むことも、師に敎はることも必要であるが、此時代には實際的訓練を最も必要とすること、恰も柔劍道に於ける猛練習と同じであります。

初段に五目前後になるには、猛練習丈では上達しない。相當の研究が要る。ソロ〳〵師について系統的敎練を受くべき時代である彼の太刀先は筋がいゝと稱せられる人は劍道の上達が早い、と同じく碁の筋を會得するには碁の本質を明かに修得せねばならぬ。夫に先輩より敎習を受けねばならぬ。その敎習の一部分を實戰に應用する。斯くて自ら得る處があつて始めて上達するといふ順序になります。

と天狗な名乘り得る處に、碁の妙

關とされて居る如く、碁にも初

その修習の一部分を實戰に應用す

る。斯くて自ら得る處があつて始めて上達するといふ順序になります。

第三段に至つては一段の研究と工夫とを必要とすること勿論であります。碁經の力が此時代に於て最も有意義に働きかけます。即ち實戰と圖上戰術と相半する位で進境が認められる。碁經、新聞碁などと首引する時代です。碁經により碁譜を並べると同時に、その解說を玩味せねばなりません。面倒臭いから後者の方を怠り易いですが、碁譜及解說と相俟つて有價値であり、言ひ知れぬ趣味も自ら湧いて來るといふものです。

筆者が嘗て迎秋門行の電車內で大毎の碁譜切り拔を讀んで居ると突然車掌君が『新聞碁を讀んだ丈では上達しないから、ウント打ちなさい』と好意的注告をして呉れたことがあります。此の車掌君第一段目位の打手だナーと思つて居ると『譜を並べてもナカ〳〵上達しないので、ウント打つたら三目程上手になつた』と附け加へて居ました。

可愛い車掌君の言葉も決して捨てゝはなりませんが、第三段級には碁譜の研究といふこと程大切なものはありません。

モウ初段近く迄に碁を解する人に、最も大切なことは、技術ー形ー以外、その內面的考察を試みることであります。

碁は肉眼のみを以て見ることなく、能く心眼を開きて洞察すべし。

といふ碁の格言がある如く、心眼を開いて打つ人は少しの技術上の欠點を補ひ得るものです。唯その三昧の境地は心頭を滅却せねば得られないものでありますまいか。

京城雜筆

道中覺え帳

前田昇

東山の秋色

東山の晩秋、其處此處に織なす錦、殊に圓山清水邊り心惡き瀟洒な構へ、物商ふ店先き迄一種の京氣分が味はれる

盛りは少し過ぎたが、未だ色褪せぬ紅葉の下の掛茶屋で一人男が手酌でチビリ〳〵遣つて居る。而も小さな昆爐を前に湯豆腐で、アー京都ならではと思つた。

清水から大谷を拔けて圓山へ行く途中、例の名物の高臺寺の甘酒を味はつた。周圍の錆びた光景は昔しながらの氣分を失はず低い床几に可愛い小さな蒲團を置いて可憐な野菊が脚下に咲き亂れて居る樣是も確に京氣分だが、サテ肝心の甘酒はといへば頗る稀薄な水っぽい唯砂糖で無暗と甘味を附けた夫は〳〵つまらぬ物であった。名物は何處迄も不味いものか。

合乘ぐるま

京都では恰も豐國神社の大祭で相當賑ひを見せて居た。丁度大祭の日であつたと思ふ。都踊りの近處花見小路邊からで在つたと思ふ。二人乘りの人力車に紅裙二人正に相乘りで來るのに出會つた。此頃の若い人に二人乘人力車と云ふ物が恐らく想像が着かめであらふ。言ふ迄もなく二人乘り得る人力車で挽手は一人である。人力車の出來始まりは多くは此二人乘りであつたのだ。併し東京邊では二十年も前に無くなつた。京都では七八年前迄此二人乘りを見たが夫れが今日尙現存するに至つては流石に保守的な所だと今更驚かされた。僕の今回の旅行中最も珍に感じた代物の一つであつた。

春日讃頌

井上收

筑紫にて歌へる（二十首）

二月なかば筑紫の野邊をわれゆきぬ梅の花咲き麥青みゐたり。

筑紫野ゆ梅さく春にあひしかど妻子あらぬを寂しと思ひき。

密柑、橙など軒端に生りて春の來る筑紫の里をわれはゆくかな。

あこもその子の母も欲りする密柑ぞと軒端をよぎりふと思ひけり。

ふさ〳〵とすゞなる密柑を吾子にやりし嬉しき夢を旅に見しかな。

筑紫路に見たる密柑の籬垣を子らに語らば嘘とやいはむ。

太宰府や天神様といふ人をあこらが爲にふしおがむかな。

勸學のお札を受けぬやがてくる試驗の子等が家づとにせむ。

太宰府の神のみまへに額づきて願ふは子等が學業のこと。

菅公は神におはせどその昔人にてありき人恨みたまはず。

この地こそ遷流の夢を見し人のゆかりなりとて梅の花咲く

梅咲かば匂ひおこせと菅公を言ひつぎ讃ふ春の筑紫路。

筑紫路はつれなき里と思ひしがあらず離に梅は微笑む。

龜山のみかどとならび日蓮のひぢりの像は松より高し。

たゝら濱えみしが來しと人はいへど波靜かなり箱崎の浦。

神功のきさいの宮がおはしたるこの箱崎よ千代の松原。

みかどきさいの宮おとゞたちしゞまを永遠にねむらせ玉へ。

日のみ子がこのわだつみの浦曲にてあれ玉ひしときくも尊し。

春なれやたゝら濱邊の松原ゆ遠潮鳴りのなごみきくかも。

ひれふりて遠潮なりの音にむせび良人を戀ひつゝ石となりしか。

旅より歸りて（十一首）

筑紫ぢの春を探ねて歸り來しがわが家の軒端冬もさらなくに。

このあした日曜なれば吾子はみな朝餉にまどひ旅のことをきく。

貧しけれど旅に求めしくさ〳〵のみやげよろこぶ子等ぞめでたし。

太宰府の神のお札をよろこばず飴をほりするさがもめでたし。

旅にいく日久にわが子を見る心妻戀ひし日のある日に似たり。

冬去りて春來る庭のありがたさ幼子達も土に親しむ。

六人は學校にゆき三人は家に遊びて春は來にけり。

知らぬ間に上手になりし吾子が琴をきかせてくれし夕餉過ぎかな。

琴爪をもてあましたる小さき指その指ざきよ金剛石の歌。

琴、蓄音器、ピアノ貧しき家にとゞろ鳴り春は來にけり〳〵。

親も子も災ひもなく冬を越しのどけき春をまた惠まれにけり。

脚を洗ふた話

鐵道局　鉅鹿曉太郎

今は昔、併合の前後に渉り劍覇を握つて半島一部の治安に任じた官人S氏、今や職を去つて山城は宇治のほとり山紫水明の地に靜かに老を養つて居る、其の二十年の昔噺。

○民事調停を掌るさる道の權力官廳に係爭多年結んで解けざる一事件があつた、此廳を主宰せるS氏一日訟廷に原被兩造並に關係者の全部を呼び出し徐ろに其の巨軀を乘り出し鮮人の夫れに酷似せる顎髯をシャクッて曰く『原被告雙方の證憑書類は悉く提出じたか』『ハイ全部提出致しました』書記は丞しく此書類の束を捧ぐる『よし』と叫んで立ち上つた此判官、傍らに烈々といこる大火鉢をめがけて證據書類を抛げ込んだ。パッと立ち上つた焔と共にあはれ一瞬にして灰と化り終つた、唖然たる滿廷を見渡し『是で全部片付いた滯りなく引取つてよからうぞ』

○星移り物變り全鮮治安の重責は擧げてカーキー服の肩にかけられた頃、夫れでも京城の一隅のさる『公共の安寧秩序の爲め人の自由を制限』する役所の長たりしS氏、或る日部下の一員と掃除人夫兩名を伴ひ大道に立つた、左側に破れ草鞋あり、右方に馬糞の散亂するあり、『オイ之れを拾へ』『夫れを捨てよ』と丹念に指揮して遂に停車場に達した、やをら腰を延ばし地上より解放されたる瞳を放つて前後を見廻はしさて『どうだ奇麗になつたらう』

○隣接官廳と所管區域に付き爭を生じた爲雙方の長は各部下一名を帶同して現場に臨んだ、相手は名に負ふ薩摩隼人口角泡を飛ばしての大激論はては地圖を指示して詳細を極めた、旗色漸く惡しと見たS氏大喝一聲『地圖が何だ、地圖が、地圖は人間の拵へたものだ理屈ではない實際で行くのだ、ツベコベぬかすと手は見せんぞ』肩を聳やかし一刀の柄を叩いて詰めよつて目出度幕。

○新年の賀詞言上の爲直屬長官の許に集る禮裝の官人多數、順を以て進み出でたるS氏、響き渡る如き大聲を以て『謹んで天長節を賀し奉る』受けた大官も面喰つた訂正を命する譯には行かない、列座の面々悉く酸つぱい樣な泣きたい樣な顏をした。別室に退いたS氏は四方八方から『天長節』を持ち出された、洒然としたS君『誰れが天長節杯と云ふか』『君方が間違つたのだ』頑として自說を曲げず。

○『今日は亡父の十三回忌故退廳後諸君は僕の家に來て呉れ給へ』との御招きに應じて罷り出でたる部下の全員ヅボンの膝を窮屈そうに折つて佛間に居流れた、喉を通るものは生唾ばかり待つこと多時漸て大禮裝に身を固めたるS氏、靜々と靈前に進み輯一輯、さて曰く『不肖先人の遺德により官朝鮮總督府○○高等官何等正何位勳何等を辱ふし——此時ポケットを探つて貯金の通帳を取出し之を開き——貯金も何萬何千何百何十圓に達す、本日忌辰に當り之れを先君の靈に告ぐるを得るは不肖の最も光榮とする處なり』最敬禮を終つてグルリ後ろに向き直つたS氏『ア、諸君御苦勞であつた今日は之れで引取つて呉れ給へ』

○行政整理でも淘汰でもない時突然辭表を親しく直屬長官に提出しさて曰く『自分が退職すれば一名の缺員を生ず願はくば小官をして推薦せしめよ』と其許諾を得て遂に之を實現し且つ自己の禮裝以下全部を此人に贈つて慇々京城の地を去ることゝなつた。其の行を盛んにせよと馳せつけた見送人は實に南大門驛頭を壓するの概があつて、萬遍なく挨拶を交はして車中の人となつたS氏、窓から首を差出して舊部下のO君を呼んだ、而も其名前の下に官名を附して……O君直ちに其の隼の如き短軀を窓下に運んだ『ア、君銃の手入れを怠らん樣によく油をひいて保管したまへ』O君唯々諾々、汽笛一聲長く響いて列車は徐ろに南に向つた。

◈牛耳洞の櫻

吉田莊一

牛耳洞の櫻といふと、京城名所の一ッになつてゐるが、それは日本の明和元年（百六十年前）洪良浩（號耳溪）といふものが內地から取寄せて植えたものである。朝鮮では英祖の四十年になる。

幕末の商傑

錢屋五兵衛翁の記憶

京城三越　尾山藤一

□

町を端づれて桑畑が細い砂道をはさんで、砂濱に續いてゐた。桑畑の途切れた處にぽつねんと一軒の釋迦堂があつた。それは町から十町許り距つた小さい港O町へ行く道と、町の火葬場へ行く道とのまがり角にあつた。そして砂山を一つ越した砂濱に大きな一本の松が南向に大きな枝を差し延べてゐた。これを私達は一本松と呼んでゐた。そこを通つて砂山へ登ると問題の河北潟が繪のやうに浮んでゐた。私達が七八歳から十二三歳頃はよくこの一本松附近へ來て、砂山を背景に、その頃流行つた兵隊ごつこをして遊んだものであるその一本松が錢五一族の磔刑になつた處だ、あの釋迦堂の美しい中年の尼さんは錢五のお妾さんが產んだ子であるといふことを聞かされてゐた。私達は子供心に、幕末の商傑が描いた大きな空想?に似た心持でこの釋迦堂の前を通つて行つた。そして時折り水汲みに出る美しい妾を盜み見て、好奇心にかられ乍ら、果敢ない生活に佗びしく暮らす尼僧の心を想ふて見た今はこの邊り、防風の松林が一帶に茂つて、砂山には無電の塔が空高く聳えてゐる。

春風秋雨茲に八十年。幕末の商傑錢屋五兵衛翁の遺跡すらない。唯砂濱に殘る一本松がその當時を物語つてゐる。私は思ひ出多いこの郷里を出でゝ、十八年。そゞろに榮枯盛衰の事實餘りに甚しきを思ふて、在りし日の錢五翁を慕ふ

□

こゝは加賀金澤から二里を距つた金石といふ小さい港である。維新前まではこゝを宮の腰といつた幕末の商傑錢屋五兵衛翁を產んだ宮の腰である。それは嘉永六年の昔に遡る。

錢屋の本家喜太郎方の奧庭の廣場、幾棟立列んだ小錢の紋章の附いた白壁塗の倉庫の一部分が下手に見える。上手には材木小屋の一部の軒へ高い梯子をかけて、屋根の上の物見臺に昇降する通路にしてある。伐り出して運び入れた許りの檜の材木などが片隅の棕梠の樹の根元に轉がしてある。正面には遠く土塀が見え裏門が閉されてある。その廣場の下手寄りには、物干竿の間に細引繩を張り渡して猩々緋や、紫や、青地に白く刺繍したのや、いろんな大小の形の羅紗、毛氈類、和蘭風の衣類などが虫干してある。喜太郎の娘お千賀十八歳の、色の小白い、怜悧そうなパッチリとした眼色、艶やかな黑髮を晒の手拭で塵除して、紅だすき甲斐々々しくブラッシュ片手に羅紗の塵を掃つてゐる、二十歳〜前後の女中のおはな、おつたの二人も手傳ふてゐる……こうした華やかな舞臺の記憶を辿つて行くと私達が描いて居た豪奢な錢五の黃金時代が想ひやられます。

□

美しい河北潟の沿岸、上手に檜皮葺の作事小屋、小屋の後横手に、こんもり茂つた森が見え、岸一帶は穗の白く出た蘆むらが茂り、波除工事の杭の大分が沖まで打込まれたのが見える。

……五兵衛夫婦等は小屋へ入つて行く。

要藏。ア、今日は……御覽の通り、仕事はだん〳〵捗取つて行きます、もう見當は附きました……お母さまも善うこそ御出かけなされたな。

五兵衛。氣の小さい婆さんだから家でくよ〳〵して許り居ると今に蟲でも出しては悪い、兎も角一度現場を見せてやつたら、片安心するだらうと思ふてやつと引張つて來たよ（潟を見ながら）沖の方まで杭は立つてゐるが、人夫が些と怠けて居るのぢやないかい?。

要藏。イヤ、人夫等は私の手足のやうになつて働いてくれますそんな心配は要りません。

おまき。（五兵衛に）この海のやうなものが眞實埋まりますかな?あんまり大がかりな仕事だから、私は一寸見ても眼先が眩みさうな氣がします。

要藏。まあ一休みして、あちらの人夫等の大勢働いてる處へ行つて見なさるが善い、潟はドン〳〵陸になつて行きよります、それこそ神業が眼に見えますか

京城雜筆

らな、もう絲口が立つたから今月の内に二百石分や三百石分の新開は請合つてやつて御目にかけます。

五兵衞。　ハヽヽヽ要藏はいつも元氣が善いな、その元氣でなけりや、やれるものもやれんわい、だが此仕事はまだ先きが永いぞ要藏。　それは市兵衞（一番々頭）からも度々やかましく云はれて居ります、それ程の目端の利かぬ私でもございません。

……

五兵衞翁は三男要藏を眼の中へ入れたい位に溺愛した。又要藏は父の氣象を一番よく受け繼いでゐた。若年者とは謂ひ乍ら五兵衞翁の青年時代そつくりの投機的氣分が彼の要藏をして河北潟埋立の大工事を企てさせた。これが錢五の得意の絶頂時代であつた。

□

幾百の生業を失はれることを杞憂した漁師達は八尺埋めれば二尺くづし、十間進めば三間流してこの工事を邪魔した。そして間もなく漁師達は一揆を起して錢五一家へ押寄せた、血氣な要藏は潟の魚を一疋殘らず無くしたら彼等もあきらめを附けやうと思ふた。

× ×

何萬といふ魚が白い腹をかへして潟一面に浮び上つた。漁師達は譯もなく、眼の下三尺もある大鯉やら、珍らしい大鯰などを拾つて金澤の城下へ賣りに行つた。すると魚毒に中つて死んだ病人があちらにもこちらにも出來て、引繰り返すやうな大騒動になつた。そうした騒ぎがお上の嚴しい詮議になつて要藏父子は召捕られた。これが錢五の破綻の發端である。

□

五兵衞翁が白洲に立つて密貿易の一件に及び、それが錢屋の今日の身上の資本だ、兄弟博奕とは違つて私は異人相手の博奕を打つて來たのさと壯語した通り彼の身上は實に大したものであつた。金銀沒收、お家缺所となつたその當時味噌漬の中に隱匿した小判の數も遂に判らず仕舞になつた程莫大なものであつた。

加賀百萬石が錢屋を金藏にして臥火の神にしたこともあつたが、錢五の密貿易の一件と檜山買占の一件とが一時に公儀へばれて、こん度はその百萬石へ火が着そうになつたので錢屋一軒を燒いて、自分は無事に免れやうとしたのが事實であるらしい。私は茲まで記憶を辿つて、錢屋五兵衞父子が封建末期に於いていかに大なる事業的天才の巨人であつたかを憶ひ、又無產階級の民衆との葛藤から胚まれて來た運命的な、又性格的な一悲壯劇を描いて見ました。

路上の出來事

しらぎ屋　安達清太郎

大寒あけの京城は、幾年かぶりの暖さを示して、小雨がしと〳〵とふる或る日でありました、急用があつて本町通りを一丁目へ向けて、大急ぎに、自轉車で走りました、すぐ私の前を、紳士風の方も、同じく自轉車で走つて居りました、丁度、朝鮮舘の前の處迄行きますと、一人の、チゲ君が大分大きな材木を背負つて、カマニ々々々と歩を進めて居りました、すぐ私の前の、自轉車乘りの方が、いきなり、自轉車にのつたまゝ『コン畜生バーセキ』といひながら左の手で、その材木を思ひきつて、押しのけました。相當に重荷でありましたが、チゲ君、タジ〳〵として正に、倒れかけそうになりました、自轉車が六七間も先きへ走つた後から、言葉は通じないが、その鮮人がお腹の底から出すやうな殘念の怒り聲が、私の胸をゑぐりました、ふり返つて見ますと、さも無念そうな顏がかすかに見ゑました、走る事暫時、電氣會社の前の所迄參りますと、又大體同じ樣な荷物を背負つた、チゲ君にあひました、私は試みに、『ヨボ君御免』と言葉をかけて、そのほとりを、通り過して見ました、處が、さもうれしそうな聲で『ネー』と永く答へて、申樣のない有難い表情を浮べて、然も大きな荷物を持つてゐて相濟まぬと、云ふ心持が見ゑまして、私もうれしい氣分になりながら、走りつゞけました。

【一一】

京城雜筆

診察所餘興

瀬戸潔

騎虎の勢（上）

暑い〳〵夏の日に全部戸を締切りて不恰好な白衣を著て大黒頭巾を被り兵隊サンの寒冒豫防のマスク様の物迄かけて熱心に手術をやつてる。患者は重傷者らしい。

手術場の出入口外で突然ドヤドヤ大勢の足音、ノックもせずに戸を開けて誰かが入らうとする。醫者は手術しながら戸の方も見ずに

醫者『誰だ又戸を開けるのは？何度云ふても解らない馬鹿野郎奴』しかられて室外に又出て行つたのは正服正帽の警視か警部らしい、今度は戸越の問答だ。

室外から『警察から來た者だ、馬鹿とは何だ』

醫者『警察も糞もあるか開けちやいかん何度も何度も』續いて醫者は熱心に血塗れの手で何かをやつてる。先刻から片隅で見て居た巡査君戸外の連中と戸越しに何か話したが醫者の傍に寄つて來る、看護婦が止める『消毒してるのだから餘り近く寄らんで下さい』約二米を隔て査公直立不動の姿勢を取る。

『司法主任が只今參りました、手術を見たいと申しますが入れては如何でせうか』

醫者『先程此怪我人を連れて來た君等が見たいと云ふから見るのはよいが途中で氣分が惡いの何んのと何度も出入してはいけないと云ふたじやないか。それだのに君の相手は二度も出たり入たりして先程も蠅が來て皆なで困つたじやないか、誰でも戸の開け立てはいけない』

醫者は嚴として聞かない。手術は中々終りそうでない。査公上役が戸外で待つてるので氣をもみ再三醫者と室外の人との交渉に當る

査公『檢察官が檢證に來ても入れませんが』

醫者『勿論入れない』

査公『そんな理由何から來て居りますか』

醫者『蠅から來てるんだ、ウルサイ』

査公解らない、途法にくれる、仕方がない。又曰く

『檢察官の檢證を拒否するんですか。そんな權限を貴君は持つてるか』

醫者『そんな法律問題は君等の領分だ、知らなければ辯護士と云ふ商賣人があるから其方で聞けばよい、僕の知つた事でない』

査公ヘコム。

騎虎の勢（下）

手術がすんで醫者は帽子や口覆ひを捨て手術着を脱ぎ汗ダラ〳〵で廊下に出る。警部數名、巡査約二十名、皆正服正帽待つてましたとばかり醫者を取り押え食つてかゝる。

警部『司法官の檢證を君は拒否したな』

醫者『そんな事知らない、解らん奴等が何人來たつて同じだ、一人見てたらよいじやないか、何が檢證を僕が拒むと云ふたか、無用の人がウヨウヨ手術場に出入すると蠅か來て消毒が臺なしになるから其出入を拒んだ丈だ』

警部『君は司法官を何と心得てるか』

醫者『人と思ふてる。人じやないのか君等は、それだから當然の事迄解らないのだ。醫者は警部にペコ〳〵するのが職業でない。人命は議論より貴いと僕は信ずる』

警部君本論では益々旗色が惡いので方向を換えた。

『吾々司法官として來てるのに君は何だ、馬鹿だとか人でないとか失敬じやないか、一體君は紳士だらう其言葉は何んだ』

醫者『此言葉は少々ならず國なまりがあつても先づ日本語で通る僕は百姓の子で醫學を研究はしたが紳士の言語は不幸にして學んだ事がないから紳士語なるものは知らない』

如斯技葉の言葉尻をお互に取合ふて果てしがない、警部君中々かしこい、部下に皆歸れと命じた。

警部君と醫者と二人丈廊下で青筋を立てる、看護婦は事務員や炊事場の連中迄呼んで來て醫者先生頑り合ひでも始めないかとオドオドして見て居る。實は警部君と醫者とは舊知の間なのだ、二人切りになると喧嘩もされず警部君を連れて自分の室に入る。

警部君『部下の前であんな恥をかゝせるとは君も君だ』

醫者『君も君の名を云ふて來ればよいのに司法主任だなんて來るから解らないよ、手術がすんで廊下に出る。警部數名、巡査約二十名、皆正服正帽待つてましたとばかり醫者を取り押え食つてかゝる。

警部『司法官の檢證を君は拒否したな』

醫者『そんな事知らない、解らん奴等が何人來たつて同じだ、一人見てたらよいじやないか、何が檢證を僕が拒むと云ふたか、無用の人がウヨウヨ手術場に出入すると蠅か來て消毒が臺なしになるから其出入を拒んだ丈だ』

警部『君は司法官を何と心得てるか』

醫者『人と思ふてる。人じやないのか君等は、それだから當然の事迄解らないのだ。醫者は警部にペコ〳〵するのが職業でない。人命は議論より貴いと僕は信ずる』

警部君本論では益々旗色が惡いので方向を換えた。

『吾々司法官として來てるのに君は何だ、馬鹿だとか人でないとか失敬じやないか、一體君は紳士だらう其言葉は何んだ』

醫者『此言葉は少々ならず國なまりがあつても先づ日本語で通る僕は百姓の子で醫學を研究はしたが紳士の言語は不幸にして學んだ事がないから紳士語なるものは知らない』

如斯技葉の言葉尻をお互に取合ふて果てしがない、警部君中々かしこい、部下に皆歸れと命じた。

警部君と醫者と二人丈廊下で青筋を立てる、看護婦は事務員や炊事場の連中迄呼んで來て醫者先生頑り合ひでも始めないかとオドオドして見て居る。實は警部君と醫者とは舊知の間なのだ、二人切りになると喧嘩もされず警部君を連れて自分の室に入る。

警部君『部下の前であんな恥をかゝせるとは君も君だ』

醫者『君が告發しようがしまいが君の勝手だ僕に何もことはる事よい』

客は一時歸つたが約一時間こゝ

はよいが途中で氣分が悪いの何んとばかり醫者を取押え食つてかゝる醫者『君も君の名を云ふて來れば

京城雜筆

ばよいのに司法主任だなんて來るから解らないよ、手術がすんで廊下に出た時君だつと初めて解つたが騎虎の勢でな君！怒らんでもよい事を』

夏の午后

看護婦『先生此名刺を持つて袴を穿いた若い人が來て×××の病氣の人が當醫院に通院して居らぬかと尋ねます、何と返事しませうか』

醫者『○○警察署○○か、云はれないと返事をして置け』

約三十分後醫者は讀みかけの新聞をかぶり晝寢しかけてる處に看護婦が又來て『先程の人が又來ましてを是非先生にお會ひしたいと申します』

『忙しくて會はれないと云ふてけ』

十分位して又看護婦が來てオド〳〵して云ふ。

『又先刻の人が來て告發するとか何とか申して居ります如何致しませう』醫者は起上り玄關に出て行つた。

醫者『君が僕に會ひたいと云ふのは、君の尋ねる人は來たとも來ないとも僕には云はれないよ、外に何か用事があるかね』

客『私は名刺の通りの者であるそれでも君は云はれんと云ひますか』

醫者『僕は君を名刺の通りの人間でないと云ひはせん、例へ名刺の通りの人間でも云はない。況やそんな名刺何處かの埃溜からでも持つて來たのでないと君は如何にして證明し得るか』

客『私は確に○○である、然るに返事してくれなければ宜しい告發するから』

醫者『君が告發しようがしまいが君の勝手だ僕に何もことはる事はない』

客『そんな事を云ふなら必ず告發する、君の本籍は何所か』

醫者『そんな事遠ふに警察に届けてあるから歸りに行つて見るがよい』

客は一時歸つたが約一時間にして又やつて來た、醫者は其根氣と熱心に感心した、今度は室に入れ醫者は道德上は勿論法律上からも病人の秘密は云ひ得ない事をよく言ひ聞かせた客は再拜して歸つた

茶ばなし

石川利夫

○

胃腸病院の佐々木さん、謠及びお能を習ふこと歳あり、而して鼓の手に至つては、カケ値なしに醫界第一人との評あり。

○

佐々木さん、どうした關係か本町みよし野の資本主の地位にあり、そこで口の悪いのが『君はウマイことをやるね、片手であんころを賣りつけ、片手で胃腸藥を賣る、これなら間違ひッこはない』……これには流石の佐々木さん『ムーン』

○

南大門通り二丁目の山田留吉さん（棉糸布商）、その名未だ大にあらはれざれど、將來大成すべき人として、知人皆敬意を表す。この頃或人始めて氏を訪ひて『御主人は？』と訊くと、店先で、ふだん著で、しきつと見本の仕分けをしつゝある人『ハイ私が山田でございます』に『ムーン』。新調の洋服で、金庫の前で、端然とやつてる人が主人でなしに、店先でまつ黑に働く人が店主などは、痛快至極な話。

○

菊池長風氏、依然として昔氣質の浪人風を持ち傳へてゐるのは頼母し。先生のふところ決して有福とは見受けざれど、いつでも家には食客の七八頭の絶ゆることなし。而して血の出るやうな金を『オゝ君持つて行け』とバラリと朝鮮志士の前に並べるのも、やはり先生の獨擅場。

○

醫界に鐵砲三人男といふのがあり。一に曰く早野博士（總督府醫院）、二に曰く和田八千穂さん、三に曰く、小林千壽さん いづれ劣らぬ殺生道の大猛者で日曜近くなると『オゝ雨がふるといゝな』『雨がふると、獵が出來ませんよ』『ウンニヤ、けふ頃ふると、日曜はカラリと晴れる！』ナアールほど、遠謀深慮のほど、聞くだに空おそろし

○

鐵道局娯樂室で、將棋の雄は即ち林原さん、また碁壇の強は鉅鹿曉太郎氏。前者は即ち正々堂々で勝り、後者は即ち奇智奇襲で鳴る。但し兩雄共に道を異にして、終生決戰の餘地なし。『惜しいものだ、アノ二人を蹴合はして見たいもんだが……』軍鷄と間違へてゐる人あり。

鍼の話

野田醬油　茂木和三郎

數年前按摩の山田が、奥さんのやうに肩張りでは隨分難澁しますから旦那さんが鍼を覺えて打つて上げたらいゝでせうと云ふて、使ひ古しを一本持つて來てくれた。鍼なんか素人の容易にやれるものぢやないだろうといふと、いやそんなものではありません、それに危險は全くありませんからまあやつて御覽なさいといふ。生來の物ずきも手傳つて細い筆の軸を切つて管をつくつて妻の肩にやつて見た。凝りに凝つてる肩はなか〳〵鍼が通らない。幾日か熱心にやつてるうちにどうやら通るやうになつた。少し馴れて來ると力をこめて採むよりは二三本鍼を打つ方が効果がある。幾分面白くなつて來た。東京にいつた時に鍼を買つて來た。背中にも腰にも打つて見る腹部にも試みた。胸の痞へが下る腹痛が止まる、便秘が通る、色々と研究して自得するにつれていよ〳〵面白くなつて來る。妻一人丈け打つて居たのではもの足りなくなつて來た、誰かに打つて見たいと思つても、素人の事故人にすゝめる譯には行かない。誰かなと思ふ矢先社員の妻君が、姙娠中齲齒が起つて、おとゝひから齒醫者に通ふが、一向痛みが止まらぬときいて、利くか利かぬかわからぬが害にはならぬから打つて見ようかといつたら、痛くてたまらぬのだから何でもして貰ひたい處なのでどうぞと來た。三日つゞきの痛みで、眼も泣きはらしてる始末だ。二本か三本打つて、家人と一と話してると、今の先まで泣顔して居たのがニコ〳〵笑ひ出した。どうだときくと、もうすつかり治りましたと大喜び、しかもそれなり治つて仕舞つて起らない、鍼もなか〳〵利くものだと思つた。其後職工の家内でチョイ〳〵胃痙攣をやるのがある。これも鍼で治りそうなものと思つて、今度起つたらためしに一つやつて見るから呼びに來いと話した。折も折其翌日のひる頃ひどく起つたと云ふてあはただしく迎へに來た。行つて見ると全く人事不省である。亭主が力一杯押へつけてもはね返されそうだ胃痙攣で夢中になつてるのは始めて見たのだから少し氣味が悪い。患者の鳩尾の處はぽつこり高くなつて居て石のやうに堅い。これでは鍼も受け付けはすまいと思つたが、ナーニ利かなくたつて恥にはならないと、大膽に三本ばかり打つて見ると、ウーンと一聲唸ると共に、胃部がグー〳〵と鳴つて今まで高くなつて居たのが、スーッと低くなつて、石のやうに堅かつたのが、一遍に軟らかになつた。占めたつと見て居るとやがてすや〳〵と氣持よささうに眠つて仕舞つた。先づ一と安心だ。又起つたらいつでも來るからといふので歸つた。夕方になつても何ともいつて來ぬから、どうしたときいたらあれから三四十分すや〳〵眠つて眼を覺し、いゝ氣持になつたといふて、お風呂に入つて御飯をいたゞきましたといふ。そんな事していゝかとがめると、御飯もおいしく澤山いたゞきました、もう何處もどうもありません。いつも御醫者に注射をして貰ふのですが、あとで氣分がわるくて、三日位は食事も進まず寢て居るのですが、今日はあとがさつぱりしてほんとにいゝ氣持ですと不思議相にいふそれきり翌日から平素の通り働いて何ともない。これが評判になつて鍼の偉効が喧傳された。斯樣に利目はあるものゝ、果して自分の打ち方が法式にかなつて居るのか皆目わからない。

鍼をくれた山田は疾うに仁川を去つた。僕の鍼を誰かに試驗して貰ひたいと思ふては居たが、態々商賣人の處へ賴みに行くのも何となく氣恥かしい。昨年鄕里に歸つた時に按摩をとつた。其按摩といろ〳〵鍼の話をしたら、なか〳〵詳しい樣であつたから、自分も少し許り鍼をやつてるが、まだ本當の事が判らぬ樣な氣がする。一つ打たして見てくれまいかと賴んだが、なんのかのといふて承知しない。素人にどんな事をされるか氣味がわるいといはん許りだ。でもとう〳〵無理往生に承知さして打つて見た。何とくさゝれるかと思つて居たら、案外にもこれはいゝ工合です。其刺激を與へる呼吸なんか何ともいはれません。これは敎へても敎へられないので全く天性でせう、實は此前習ひの小僧に肩へ打たせた處が、下手にやられて横腹こひぎ、一三手を[illegible]た處ですが、今打つて頂いたので[illegible]

害にはならぬから打つて見ようかといつたら、痛くてたまらぬのだ〳〵と氣持よささうに眠つて仕舞つた。先づ一と安心だ。又起つた

肩へ打たせた處が、下手にやられて横腹にひゞき、二三年そこが變に痛んで閉口したことがあります それ以來怖ろしくて餘程うまい人でないと打つて貰はぬ事にして居るのです。どうも三四日前から胸がつかへて食事が進みませんので誰かにやつて貰ひたいと思つて居た處ですが、今打つて頂いたので胸がすつかり下つて大そう氣持がよくなりましたと云ふ。それぢや鍼の試驗は及第かねときくと、いやもう及第處か優等ですとの事で大に自信を得た。事情が許せばもつとしつかり研究して見たいと思つて居る。

京城雜筆

對局秘訣

將棋八段　金易次郎

一　精神統一

昔の將棋定跡の本などに、對局者の心得を十ケ條位の個條書にして、卷頭に掲げて居るのは、讀者諸君も既に御承知の事と存じますが、茲に私が十數年間に亘る、實戰の經驗から得た處を掲げて、諸君の御參考に供したいと思ひます。蓋し昔の心得書は簡約で、概括的で、初心者には餘り實戰の役に立ちさうもありませんから、私は成るべく分り易く說明して見たいのです。

先づ第一の條件としては、一たび盤に向ふと、凡ての雜念を去り虛心坦懷棋局其のものに沒頭するのが必要です。之を新しい言葉で云へば、一種の精神統一であります。家内に取込事があるとか、大切な用事を控へて居るとか、卑陋な話ですが便所に行きたいのを我慢して指して居ては、此の精神統一が完全に行はれないから、如何なる高段者でも、到底妙手を發見することが出來ないのみならず、有利な將棋でも、飛んでもない見落をして負けになることがあります。

專門棋士でも此の精神統一を短時間で遣り得る者と、比較的長時間を要する者とがあります。私などは下根とでも云ふのですか、比較的長時間を要する方で、從つて將棋が長くなつて、現時の樣な持時間制度の下では不利益でありますが、成るべく短時間で、精神統一の出來る樣に訓練するのが必要で、特に競技などの場合に有利であります。

◈嫁取りの話

吉田莊一

○

商銀の古宇田專務、先年夫人を喪つてから、今以て寂寞たる獨身生活をつゞけてゐる。そこで、同じ銀行家仲間が同情し『君はマダ若いんだから、早く嫁をとれ』と何かの機會に勸める。

○

中でも熱心なのは和田頭取で『君、いよ〳〵いゝ候補がないなら例のおえんはドウだ。あれは文學者だぜ』『ですが、先方がウンとはいひますまいよ』『ナニそんな事があるものか、ソレから第二は桃太ぢや、君あれはどうだらう』『ウンといひますか』『ナニいはんことがあるものか……』食堂會議でコンナ與太話さへ出る。

○

すると、この間の松原純一氏の送別會に、氏を挾さんで、古宇田森（殖銀）の兩氏が食卓につく。どつちも獨身者だ。そして妻なきのちの家庭の不自由さを歎息し『君はこの寂寥さを知らんだらう……』と松原氏を顧みると、俳人松原は『先輩に向つて、馬鹿いへ。その味を知らいで……』と昂然としてゐる。それもその筈、松原氏は十年も前に夫人を亡くし、長い間孤獨を守り『俳これわが伴侶』で暮したもの。ワケを聞いて兩獨身『フーム、君もそうか、どうも一度女房をなくした人間でないと共に人世は語れないやうだ……』

○

並みゐる女房持ち、この怪氣焰に『オイ、やつとるぜ、やつとるぜ……フ、フ』

未知の知人

堂本貞一

【一六】

しかし、これらは、〇〇氏に於ける程の錯覺を惹き起しはしまい。

成程、文は人なりと謂ふ。

文を知るは、其の人を知るのであるとも云へやう。其の文を讀んで其の人を慕ひ、その作を味はつて其の人を敬ふと云ふ例は古今、甚だ多い。

さりながら、それと、これとは自ら相ひ異る。

雜誌に、新聞に、將た著書に、他人の言說を見、作品を讀む。しかし、それは講壇の前に座し、また演壇の下から耳にするやうなものである。たとひ、それが、親しき仲間同志の同人雜誌であつてもそれは、恰かも學生時代の雄辯會に類するものであつて、膝突き合せての談合ではない。

ところが、京城雜筆は、改まらない、極めて打ちとけた、親しい仲間同志が、談話室に寄り集つて茶を飲み、煙草でもふかしながら談笑して居るやうな氣持ちのする雜誌であつて、謂はゞ、ペンを以てする談話室とも稱し得やうかと思はれる。

これが、錯覺の原因であり、かゝる錯覺の原因であることがあり得るところに京城雜筆の特徴の一つがあるのではなからうか。そしてそこに、親しみが生れ、氣輕さが湧き、理窟も角張らず、高論卓說も肩を凝らさずに伺ひ得るのであると思ふ。時に、あんまりシンミリし過ぎて、殊に、御不幸の便りや思ひ出に接して涙を催させられることもあるが。

（私の京城雜筆への投稿は、これで三度目なので、その記念と云ふ譯でもありませんが、京城雜筆觀の一面を披露に及んだ次第であります）。

は、つひ、自分の知つてる人に矢張り〇〇と云ふのがあるもんだから』

とお斷りした。

客が、去つた後、暫く考へて見たが思ひ出せなかつた。

それから幾日か過ぎた。

談論風發と謂つた、元氣のよい若い客の辭去した後の數刻を、煙草を喫しながら机に倚つて居るとフと思ひ出したのが、過ぐる日、紹介して呉れと頼まれた〇〇氏。

當時、まるで思ひ出せなかつたのも道理、自分は〇〇氏とは全然一面識もないのである。

それならば、何故、よく知つて居る人だと思つたのであつたらうかと云ふに全く錯覺であつたのだ。

その錯覺の原因は、此の京城雜筆――と云へば妙なことを言ふと思はれるかも知れないが、それは事實である。

〇〇氏は屢々、京城雜筆に寄稿されるので、その文に親しみ、その御名前が、自然と頭に泌み込んで居たので、それが原因となつて右の樣な錯誤が起きたのであつたかく、氣が付いて、京城雜筆を披くつて見ると、〇〇氏は先日の客が言はれた通り××の方であつたかつては、寫眞結婚が問題になつた。

今はラヂオの流行から聲だけの知り合ひが生れた。

客『君、〇〇氏を御存知？』

私『エー、存じて居ます』

客『それでは一つ紹介して下さらむか？』

玆まで來て、ハッと思つた。

最初、〇〇氏を御存知かと訊かれたときには、實際、辱知の間柄の人だと思つたので、知つて居る旨を答へたのだが、さて、紹介して呉れと頼まれて見ると、本統に申譯ない次第だが、皆目、見當が着かぬ。

色々、思ひ廻らして見たが、一向、思ひ出せぬ。面容はおろか、何處の何をして居る人だつたかさへ、わからない。

ほと〳〵困りぬいたが、今更知らぬとも言へぬ。

私『僕は思ひ違ひをしたかも知れないが、君の言はれる〇〇氏とは何處の方ですかね』

客『××の△△△△をしてる人だよ』

さて、弱つた。全くわからないしかも、〇〇氏とは何處かで、しかも、一再ならず、面接したことのある人と思はれるのであるが、××の△△△△と云はれて見てもその人と面識あらう筈はない。そこで、自分の知つて居る〇〇氏を思ひ出さうとするが、ドウしても思ひ出せぬ。

仕方がないので、

私『あの〇〇氏は知らない、僕

私『あの○○氏は知らない、僕　知り合ひが生れた。

第でありますの。

夢

―二度目の人殺し―

松本　光

×

も一つ人殺しの夢――

私はどつか廣い通りに立つてゐた。私は兩方の頰ぺたに大きな膏藥をはつてゐる。さつきからそれが氣になつて仕方が無いのだ。一寸人通りが絶えたので此の間にと思つて大急ぎで膏藥をはがした。そのまゝ立ち去らうとすると、巡査が出て來た。『何だそれは』『膏藥です』と答へると、『よし、證據物品だ』と云ひ乍ら拾ひ上げた。生憎ベットリと血がついてゐる。巡査は恐ろしい顔をしてポケットにしまい込んだ。サア大變、何故か私は非常な手ぬかりをしてしまつた樣な氣がした。

……私は電車にのつてゐる。乘つた所はたしか京都の寺町丸太町の筈だつたのに、電車が停ると、赤い柱に『永田町首相官邸前』と書いてある。私は慌てゝ降りた。そしてずん〳〵官邸の中へ入つて行つた。

官邸の二階で、私は小間物屋の夫婦を慘殺した――始めは二人で夫婦喧嘩をしてゐた。すると、どうしたはずみか私が亭主になつてゐて、生意氣を云ふ女房をつまみ上げた。そしてアルゴールランプにかざすと、親指位しかない人形の女房だつたからすぐ灰になつてしまつた。それからふと振り返つて見ると、私は女房ばかりでなく、小間物屋の亭主までも、慘らしくやつつけてゐるのに氣が付いた。

大變だ、と思つて表へ駈け出して電車に飛びのつたら、さつきの巡査がゐたのですぐ飛び降りた。そしたら泥の中へぶつ倒れて、見る〳〵人だかりがした巡査が降りて來て何か云ふから『いゝです、いゝです』と云つて逃げ出した。

家へ歸ると兄にだけうち明けた。兄はひどく心配して、着物に血がついてゐるかどうか、何べんも調べる。『大丈夫だ』といつてもまだ調べてゐる。そこへ號外が來た。大きな字で『キャンベル殺し』と書いてある。キャンベルを殺したのは、即ちこの私なのだ。――小間物屋はいつの間にかキャンベルといふ毛唐に變つてゐる――もう知れたか、と眞青になつた。誰にも云ふてくれるな、と兄に哀願すると、『どうだかわからない』と兄は急に冷淡になつてしまふ。あゝ悪い奴にうちあけた。これは兄も殺してしまはなけりやいけない。と私は思つた。

……私は兄とキャンベル殺しの活動を見に行つた。人ごみの間からこわ〳〵覗いて見ると、印半纏の男が二人で斬り合つてゐる寫眞だ。しめた、職人が殺したんだ、俺ぢやないんだ。と安心するとたんに……寫眞が變ると驚いた。兩方の頰ぺたに膏藥をはつた私の顔がうつつてゐる。『これが犯人です』と辯士が云つてゐる。

逃げなけりやいけない。早く逃げなけりや。『待て、待て』といふ聲がして、ぐつと襟首をつかまへられた。あらん限りの悲鳴と一緒に……目がさめた。

◈無駄ばなし

平田久雄

○

横田高等法院長は、繁務の餘暇に、折々童謡などを作つて樂んで居られるが、中にはスバらしい傑作があるとの評判である

○

商蠶會頭の渡邊さん、大ざつぱの人物に見へて、中々こまかい處がある。併も物覺えのいゝには感服の外はない『僕の目があいたら貴誌を讀む』と、何かの折に記者に語つてゐたが、此間氏から左の端書が著いた。

いよ〳〵目があきました。御約束の通り貴誌を讀みます會議所宛お送り下さい。

京城雜筆

或日の强盜と私

今本義胤

【一八】

六年前の出來事である。

龍山の米屋に闖入して主人を殺した二人連れの內地人强盜が南山に穴居して居るといふ情報で夫れを逮捕に向つた刑事達と賊との間に格鬪があつて刑事の一人は斷崖から突落され賊の一人は刑事の放つたピストルに負傷したまゝ逃走したといふ噂を聞いた。其の日に官憲からピストルで負傷した患者が來たらば通知する樣にとの內達があつたが然し左樣な物騷な患者など滅多に紛れ込む氣使はないので他所事として全く閑却して居た

其の後一週間を經た日の朝みすぼらしい一人の若い男がピストルの彈丸を拔取つて貰ひ度いといつて訪づれた。

『オヤッ』……瞬間先日の事件を想ひ出して犯人かも知れないとの豫感が閃いた。然し何氣ない態に、

『如何してピストルなんかで怪我しました?』

『友達と巫山戲てゐてやつたんです』

傷は射入口は左手掌の中央で彈丸は貫通せずして手背の皮下に留つて居る。皮膚を隔てゝ其彈丸の形を明に窺はれる。手術は極めて簡單に行はれ得る狀態にある。

『傷の模樣から診ると大分日數が經つて居ますね』

『えゝ、約十日になります』

『今まで放擲つて置いたんですか?』

『えゝ』

『亂暴ですね、そんな時は早速醫者に行かんといけません』

叱る樣な小言の樣なことを言つたが內心飛んだ奴が舞込んだものと尠からず驚いた。

眞冬の寒さに羽織も着ず纏つて居るものは眞黑く穢れたメリヤスのシャツと古ぼけて綿目も判らぬ袷衣一枚だけである。夫れも數多の綻びと鉤裂きとが修繕を加えられずに慘らしく口を開いたまゝである。

髮は伸び、顏や手足は垢だらけである。擧動に落着きがない。眼は猜疑らしく動いて居る。

遂に犯人に相違ない。

不圖變手柱な功名心が私を唆つた。

此の强盜奴一つ組數いて縛上げ警察に引渡して遣ろう。すれば世間の稱讃を贏ち得て私の勇名は頓に擧るであろう。

斯く言へば或は私の勇氣の持合せを危ぶむ方もあろうが、其際眞實捻ぢ伏せて見る積りだつたのである。といふのは其男が非常に弱そうである。獰猛、慓悍、機敏、などいふ點は微塵も見出せない。背は五尺に充たず、非常に痩せて居る。傷の疼もあつたであろうが犯行後食物も碌に採つて居ないらしく見受けた。上膊や胸部の筋肉は削痩して膂力などあろうとは思はれない。身に寸鐵も帶びてない事は確だ。

頑冠りした巨漢がギラ〳〵光る匕首を突着けてこそ强盜の眞價は發揮されるのであるが之は又資格を具備せざること夥しく何等の威にも價せない。

斯樣な貧弱な强盜なれば何人と雖も一寸捕まえて見る氣になるだろうと思ふ。腕を捻り上げてもよし背後から不意に羽搔締めにするなどは最も妙である。

然し此の男が犯人であることは一點の疑もない所だが推定は要するに推定に過ぎぬ。輕率に手を出して萬一間違である場合に醫師が治療を受けに來た患者を絞めあげて警官を呼び、それで人違ひであつたなどは喜劇にしても惡洒落だ

次に頭に浮んだのは治療準備として痲醉藥を注射して眠つた時に警官に見せることである。眞犯人であれば易々と捕縛が出來るし又人違ひであつたら默つて歸つて貰えばいゝのである。

安全で面白い方法ではあるが然し一種の欺瞞である。例へ相手が非道の惡人であろうとも自分を信賴して治療を求めるのに仁術の假面の陰に隱れて昏睡に陷れ牢獄に送り込むといふのは忍びない。君子の擇らざる手段である。私の藥品は左樣な目的に役立てる爲に備へて居るのではない、又技術への冒瀆である。男は默々として項垂れて居る。

連日連夜追廻され體の置き所もなく不斷の不安に神身共に疲れ果た此の男が憫まれた。

窮鳥懷に入れば……といふ理屈のドに一寸芝居氣も擡頭する『手前凶狀持だな、詮議が嚴しいぞ、寸時も早く、之は旅費だ』と俠容たが最後地獄まで引摺られずには濟まぬのである。

『犯人は犯人でせうが夫れにしても思慮の足らない不用意な點

京城雜筆

前囚狀持だな、詮議が嚴しいぞ、寸時も早く、之は旅費だ』と俠容張りに好い氣持になつて煙管啣えるには第何條とかゞ赦さぬ。

極度の憔悴、氣力の消失、此の儘放つて置いても到底逃げ終せる代物ではない、遠からず捕まる運命にあるものと思はれる。されば一層自首を勸めて見ようか、彼が容れ相にない。容れなければ極めて拙い結果になる。

やはり最良の策は當局に通知するのだ。

然し今直ぐに彼の望を協へて彈丸を抉出し治療を了へ立ち去つた後で知らせたのでは手掛の一つを消滅させるので今後の搜索が困難になる。氣が付かなければ兎も角夫れと諒察した以上當局に對して甚だ相濟まぬことになる、といつて本人の居る間に通知することは不可能である。彼は始終私の一擧一動に絶大の注意を拂つて居るので一寸でも彼の眼前から離れるとか又家人との耳語などは最も望ましからぬ結果を招致しそうである

窮局彼に告げた。

『今急患があるので往診せなくてはならぬ。四時頃來給へ。其時手術してあげよう』

彼は再來を約して去つた。

警察に電話をかけたので早速四名の刑事と司法主任とが見えた。銘々藥瓶を提げたり繃帶を卷いたり病人の姿に變裝して居た。豫め犯人は已に去つた後であることは解つて居るにも拘らず此の周到なる用意には感服せずには居られなかつた。

刑事は男の人相著物など詳しく訊ねた後で眞犯人に相違ないと語つて武者震いした。

私は刑事に、

『犯人は犯人でせうが夫れにしては思慮の足らない不用意な齟がある樣に思はれますが』

『軍罪犯は皆そんなものです、一面には異常な鋭さを持ち反面には拔けた所がありますよ。眞に賢い人は殺人强盜の樣な割の合はぬ馬鹿らしい仕事はしませぬでしよう』

『家の中でドタンバタンやられては災難ですね』

『否や、グツともいはせません是れですから』

と言つて各人が短銃を擬して示した。

約束の時間が近づいた。

刑事達は身を潛めた。玄關の戸が開く音のする度毎に皆緊張した山雨到らんとして風樓に充つとでもいふべきものがあつた。家人達は怖れて他の來訪者の取次にさえ出得なくなつた。

刑事達が勇んで居るに引換へ私は其間次第に彼が來ない事を秘に希望する樣になつた。

嚴重な警戒線とやらを潛つて危險を冒し二度まで私を訪づれるのは苦痛を癒したい爲ではないか。然るに傷は治してやるが命は縮めてやるでは變なものになる。彼にとつて救の家と思つたのが墓穴への入口となるのだ。喜びの家が呪の家になるのだ。

之は來ない方がいゝ。せめて他の場所で捕まる妙案はないものか

ピストルに圍繞されて恨めし氣に出て行く彼の姿を想像して私は裏切り者になつた樣な厭な氣持になつた。

男よ來るな。來てはならない。

三十年前妙義山の天狗は現はれたところで握り屁をかまされたに過ぎないであろうが汝は姿を見せたが最後地獄まで引摺られずには濟まぬのである。

男よ來てはならない。

其の日彼は遂に見えなかつた。次の日も刑事は終日張つたが彼は來なかつた。

二週間の後黃金町で逮捕され彈丸は其時まで其まゝだつたそうである。

私の家に何故再び行かなかつたか？と取調の係官が尋ねた時彼は其折の私の顏付きで、

『これは危い、手が廻つて居るな』と感付いたと答へたそうである。私は悟られた筈ではないのだが。

賊が治療に小院を撰んだ理由に想ひ到れば苦笑を禁じ得ぬ。

◈戀文なれば

吉田莊一

日蓍の大須賀さんは、粹人である▲不用意の一言一句が、尙且つ氏の面目を躍如として表示するから面白い▲日蓍の小使が、大事な寫眞を自轉車で届ける途中、用便がしたくなつて公衆便所へ這入る▲出て見ると大事〳〵の寫眞が、モウ紛失してゐる▲そこには自轉車があるばかりだ▲先生青くなつて會社へ引返し、實は斯くの次第……と、冷汗を流すと、大須賀さん『それが寫眞であつたから、マダいゝ、君、人の文でも、持つて行く途中、そんなことになつたらどうする……』小使三たび頭を下げて『ウ、へー御尤……』▲渡邊商議會頭、朝鮮新聞や京城日日に盛んに紀行文を書く▲いづれも待者に口授したものそして曰く『俺のいふ通り書け、餘計な文句を入れるナ、えゝか、えゝか』

【一九】

兒を抱く人々

片岡喜三郎

家に歸つて湯に這入つて夕ご飯となる。飯臺の周圍にヅラリとならんだ六人のわが子を見渡すと自分ながら可なり盛なものだと思ふ。おまけに細君の背中にも誕生を過ぎた許りのがのつかつて居る。人間は食ふときが一番神聖だと皮肉つた人もあるが、一つ時靜かにしてゐることの出來ないこの子供らも飯臺の周りではいと神妙なものである。めい〳〵與へられた自分のものを自分の口に運搬するのに忙はしいので、みな罪も邪念もない佛樣のやうな顏をしてゐる。暫らく無言劇が流れる。箸の音茶碗の音と鼻ずすりの音の外は何もないやがて一番氣の早いのが『ご馳走さま』と立ちあがる。するとそつちでも『ご馳走さま』こつちでも『ご馳走さま』。最後に親父がご馳走さまになる。

『あなたちよいと、すみませんが、臺所を片付ける間坊やを見て頂けませんでせうか』『うん』

臨時子守役を拜命して誕生過ぎを抱いて外に出て見る。寒い〳〵と云つても最うぢき彼岸だどうやら春が來たしい。柳の小枝も靑み走つて來たし、櫻の蕾も大分ふつくらとして來た。そよと吹く風も溫みを帶んで肌さはりがいゝ。通稱文化村の赤瓦屋根の界隈もなんとなく陽氣になつて來たやうだ。文化村と稱しても實は安月給取りの集合のやうなものであるが、公平なお天道樣は四季それ〴〵時のものを與へて呉れるものと見へるぶら〳〵と背戸路を通つて廣場に出る。土手の若草もそろ〳〵崩出して田圃の靑み泥がおたまじやくしをはらんでゐる。今までオンドロに引籠り勝ちの身が急に晴々しい氣分になる。來る春の惠みを想ひながらひよいと向ふを見るとそつちにもこつちにも四十男が赤ん坊を抱いてうろ〳〵してゐる。お多分にもれぬ女中も置いてない文化村のご主人達が散歩兼子守と云ふ格式で陽氣に乘じてそこへらを練り廻してゐるのである。これらの人々は人間の群居性本能の原則によつて次第に近寄る。

『やあ、大分いゝ氣候になりましたな』

『もう今年の寒さもこれで終りでせう』

『この土手の櫻が咲く頃は見事でせうな』

『これからはかうした郊外に限りますね』

實はこの人々は正式に『某ことは何の誰と申して原籍何縣且下何役所に勤務してゐるものでござる』と名乘り合つたことぞないが、朝夕アルミニユームの辨當箱の這入つた折り鞄を抱へてお互に顏見合はす所謂見知り越しの間柄である。從つて互の子供や細君同志が

【二〇】

いつとはなしに往來して時に水道側會議の協議員たる仲である。

『ほう隨分肥つてますね、いつ生れです』

『誕生過ぎたばかりですがね、ちよつと見て下さい』

惜しげもなく赤ん坊のお尻を捲しあげて馬鈴薯のやうに肥つた足を出して見せる。足くび膝のくるぶし、股のあたりは二重になつた肉がはち切れそうである。

『これはどうも、ふうん、何貫目あります？』

『さあ、かけたこともないがね三貫目位かゝりますか』

『大の男になりますな』

『ところが女で』

きまり惡くなつたと見えて赤ん坊のお尻を輕くぴしや〳〵たゝく。

『寒いでせう、お了ひなさい』

『少々風にあてた方がいゝでせう。時にお宅のは？ぶうん、大へん器量よしですな』

『いやどうも、これで野郎ですから』

『野郎かな、コラ、笑つてゐる愛嬌ものだね、物騷ですぜ、好男子になつて親父をなかすか』

『女なら女優と云ふところか』

品評は次から次に移る。

『これはまた眞黑ですね、お父さん似か』

隨分無遠慮なものである。

『印度人よろしくですよ。種はあらそはれんものだよ』

『全くだ、これで色白のでも出來たら問題だからね』

『こつちはどうです、この髮の毛のちゝれ加減は』

『大きくなつてわざ〳〵コテを使はんですみます』

『畑にそつくりさ』

『はは、はあ——、これはまた眼玉が馬鹿に大きいね』

『隨分子供も、出來るもんですすからね』

『どうしてかう出來るんでせう』

『どうかしましたか』

『いやどうも』

となく陽氣になつて來たやうだ。
文化村と稱しても實は安月給取り合はす所謂見知り越しの間柄である。從つて互の子供や細君同志が

『畑にそつくりさ』
『ははあ――、これはまた眼玉が馬鹿に大きいね』
『隨分子供も、出來るもんですね』
『こゝにだけで抱かつてるのが五人袖にすがつてるのが三人ですからね』
『どうしてから出來るんでせう？』
『さあ？』
『おや、大變だ』
『どうかしましたか』
『いやどうも』
『何です』
『おしつこをしやがつて――！』
『はつはつあ――！』
『子守はもう免職だ、早く返納する外ない』
『僕らももう返納しよう』
淡い闇が文化村に立て籠めたころ小便をしかけられた四十男がわが家を指して歸る。期せずして偶然に出來た赤ん坊品評會は閉會の辭もなく思ひ〳〵にちつて行く。

京城雜筆

自家廣告

高橋章之助

諸先生方毎號の隨筆、誠に愉快に拜見致します、私は訴答文書の原稿の外にはあまり筆を取らぬ方でありますが昨年一月以來は朝鮮教育といふ雜誌を出しまして自然に執筆の責任を持つ事になりました。殊に昨年十二月末に新聞紙法によりて發行する事の認可を得まして時事の論議を爲す事が出來る樣になりましたから時々の所感を遠慮なく論評するとなれば原稿用紙と鉛筆は常に携帶する樣の勉强家になりました。それ故に松本先生の雜筆にも自身にその廣告を致したいのですが元來私は眞面目に自己の所信を貫徹したいのが性質でありますから、私の新聞紙上には色々の事項を掲げますが就中社會教化の事に努力致したいのです。雜筆投稿諸先生方は夫々社會各方面の御職務に從事されますから、各位の從事せらるゝ仕事の上に就いて關係ある新同胞を愛護し誘掖して勤勉努力の民衆たらしむる樣に相互に社會教化の先導者となる事を御願したいのであります。元來社會教化の仕事は多方面でありますから雜筆投稿家各位が何れもその考にて進みますれば確に至大の効果がある事と思ひます。又或る人は司法官なるが故に教育とは關係がないとか銀行家なるが故に教育とは沒交渉なりと誤解せらるゝ人もある樣ですが社會教化と言ふ仕事は左樣な偏屈のものではありませぬ。凡そ社會百般の事が毎日々々修練を要するもので修練は卽ち教化であります。苟くも教化なるものは自己修練もあり長者より修練せらるゝこともありますが、新同胞に對しては今日の現在にては我々內地人が愛護し誘掖するの責任があらふと思ひますから雜筆投稿家諸先生及び讀者諸君は其本業に關し夫々社會的教化を御願致したく敢て自家廣告を申上ぐる次第であります。

◈頬杖ついて

平田久雄

◎武安福男さん、鮮銀支配人として馴染深き京城に戻つて來る。

◎南山北岳、笑つて君を迎ふるの感があるだらう。

◎東京では熱心にゴルフをやつたらしい。技量も伸々あがつたといふ評があつた。兎に角こゝに一勇將を加へるのはうれしい。

◎寺尾猛三郎氏、漢籍の造詣が深く、又好んで國文學を涉獵してゐる。堂々たる一箇の學者だ。ところが十歳ばかりのその令息には外人教師を迎へて、熱心に外語の研究をやらせてゐる。『流石は寺尾學館主人だけに、手廻はしのいゝものだ』といふ評がある。

◎殖銀の渡邊彌幸さん、痩我慢の强いことと、强音を吐かないことに於ては、人後に落ちない先生だ。ところが今度の神經痛には流石の渡邊氏も大閉口。指宿溫泉にあつた時、行き合せた釘本氏が見舞ふと、ドウにも正座して對談するに耐へず『誠に勝手ですが…』とトウ〳〵寢床の上に横になる。『僕も今度許りは兜を脫いだよ』

【三一】

或日の安南王

螺炎　今村鞆

〔二二〕

◇　◇　◇

後苑の空に澄める、爽かなる夏の月影は、池畔の層樓を照らして紅白の蓮花は風に清香を放ち、樓上に立並ぶ銀燭は、光りの諧調を躍らせて、金盤玉盃を反射し、樂人の奏する短夜の曲は、快よき旋律を漂はして、嬖姫寵人の羅からは、脂粉の薫りが漲つて居る、媚びと、酒と、笑と、美が渦卷いた

◇　◇　◇

暖かなること春の如き寢殿には窓より溶け入る青き冬の月光が、樣々の陰影を畫いて居る、肌へに輕き緞綢の夜の具は、骨牌の如くに敷きなされ、全く覆ひの捨てられたる、眞白き樣々のししむらは薄明りに滑かな曲線の波を立てゝ居る、柔かき觸感、暖かき血、唇の雨……。

◇　◇　◇

老王は、斯の如き王位眞盛りに時めきたる、追懷の繪卷物を展開して、自から其の情景に浸りて快よく自己陶醉し、恍惚として過去に活ける時、忽ち廻廊に起りし人の足音の爲め、此の甘き思出の蜃氣樓は、跡なく打消されて、王の面色ちは、元の憂鬱に復し、甚しく不機嫌なる時、侍女は靜かに閾の際に手をつかへ。

『只今阮子爵樣が參入せられて御座います』

と言上した。

此阮子と云へる若人は、王の一族にて、英俊機敏に、最も老王の信任を得し者なれば、王はよき徒然の相手を得たりと、其居間に引見し、打融けて四方山の話しを交へて居た、宮中の夜は靜かにして陰鬱であつた。

其中、王は、思ひ切つたかの如く、嚴かに一段と、調子を低めた將に消へなんとする間際の、悶へを味はずには居られなかつた、特に王位をすべつて後は、一層寂寥の幕が擴げられ、舊臣昵近の者も佛蘭西總督の思わくを憚かつてか伺候すること稀に、側近く侍ふる者さへも、何んとなく、己れを侮れる如く思ひなされ、つくづくと己れの姿の、儚なき影を感じ、やるせなき不安と、焦慮と、寂寞の續く日を送つて居た。

現在感興の失はれた、砂を嚙むが如き、味氣なき生活の不滿を、思ふ時には、常に華やかなりし、昔しの豪奢な光景が蘇つて來て、其思ひ出が幻の如く、夫れから夫れへと、繰り展げられ、昔しを今になすよしもがなの、嘆きにもがかれた。

◇　◇　◇

紅ひの戎衣を着なし、肥馬に跨れる、儀仗騎兵の一隊は、肅々として先驅し、花やかなる繡文花紋の朝服を裝ひたる、文武の大官は供奉として鳳車の前後に、幾流れの列を作り、五彩の旗は飜々として春風に連なり、蜿々たる一大行列となつた、堵の如き民衆の中を靜づ〳〵と練つて、威儀堂々地を拂ひ、王冠の瓔珞は鏗鏘として、美妙の音に鳴つた。

る聲に力を入れ。

『子爵お前に見せる物がある』

と、ツト立ちて、二重の鏡前ある手箱より、靜かに取出したる、小さき一個の物體を手渡した。

之れを掌に受けたる子爵は、滑かなる薄墨色の卷尺の如き、一品と老王の貌とを透みに見比べつゝ不審の眉根を寄せたる時、王は更に、

『夫れを振げてよく見よ』

と斯く言ひつゝ、相手の表情の變化を見守つて居る、子爵は渦卷ける一物を、其の一端より引延ばし電燈の灯に透かしかざし、光澤ある平面へ、毛の如く細微に形像せる、畫文に目を凝らし、瞬きもせず幾度か、靜かに檢し了つた時、

『よく拜見致しました、よく判りました』

と、老王の手に返戻し、驚きと希望と不安が混合せる、意味深き表情の中に微かな笑ひを見せた、王は再び起つて、嚴重に彼の箱に納め了りて、元の如く對座したる時、四つの瞳は緊張の光りを露はし、沈默の裡、互に鋭き妙なる目なざしの働きに、何事か重大なる無言の談話を通はせて、うなづき笑み合ひたれど、二人の考への動きは、全く異りたる方向に思案をたぐりつゝあつた、新らしき世界を知れる若人と、王宮外の天地を見ざる老王とが。

やがて數分の後、子爵は思ひ惑へる面もちの儘退出し、あとには老王一人端座して、瞑想を續けて居つた。

別宮の秋の夜更は、より陰鬱寂寞であつた、夜は淋しく流れた、何處かに鼠の走る音が聞へた、池の闇には鯉の跳ぬる水音がした。

一生涯を、數奇の運命に弄ばれし老王は、世に傳へられたる如くには、狡獪でなく、割合に人間味豐かなる、好々爺であつた、王位と云ふ如き權柄は、彼れの强ひて欲望する所ではなかつた、唯王位に附隨せる、華やかさが、彼れの終生の執着であつた。

愈、獨逸側が敗戰と極つた時、溺者が藁を掴むが如き、果敢なき一縷の望みに活きし老王の貌は、絶望の曇りに包まれた。

彼の物品は何んであつたか、夫れは確かにフヒルムの一卷きである、畫面は、世界の小弱國、保護國、亡國なる、十數ケ國の國旗を祭壇に建てゝ、嚴かなる祭典を擧行し、其國々の復興隆盛を、神に祈りつゝある場面である、敬虔の態度もて、熱心神に祈れる人は、紛れもなき獨逸皇帝カイゼル其人の、綱々たる英姿であつた。

此の春秋蘇張式、反間苦肉の大文書が獨逸本國から如何なる經路手段により、佛國の監視嚴重なる安南の宮庭に迄忍び入りし？は、今に解き得ざる謎であるが、當時獨逸の參謀本部が、細作の網を世界に張つて居て、變幻極りなく策動したる敏活さには、驚かざるを得ぬのである。

此の一小話は、關係者以外、未だ世界の何人にも知られざる、世界大戰祕史の、價値ある一斷片であり得る。

◈聞くがまゝ

吉田莊一

朝鮮印刷といふと、半島印刷界の權威であるが、最近には蓬萊町に新工場が出來る、九ポイントのモノタイプ二十何臺を据へつける、內容いよ〳〵整備し、壓倒的威力を斯界に肆まにせんとしてゐる▲支配人を羽田君といひ、名代の喧まし屋兼肝癪持だが、一種の俠氣を有ち、一流の太ッ腹を擁し『ヨーシ』と引受けたら、どんな藝當どんなアト押しでもやるので、痛快な男だとの評がある▲朝明舍の石橋さんこの間から將棋を習いかけ時々桂馬の行き道を忘れ、おつと、どう行くのかなは罪がない▲宋森さんも一寸やる、時々二人で對局する。そして曰く『是でも勝負がつくからエライもんだらう』

誰れもが老年期に經驗する、人生悲哀の淋しさと、歡樂愛慾の焰が拂ひ、王冠の瓔珞は鏗鏘として、美妙の音に鳴つた。

其中、王に思ひ出でつゝ、嚴かに一段と、調子を低めた

春日雜詠

鐵道局　百瀨千尋

さくらばな極まりさけば櫻谿したてるみちの今宵あかるき

はざまみちにほふ櫻の花明りひとりし歩くはらさみしけれ

ひるちかき床にめざめてつれづれのたのしきこころしばしたもてり

窮まりし生活をよそに子がまへを腹這ひにけり犬のまねして

いとけなくのぼるわらべに諸除も肩もゆるして吾れもうれしき

岐路

一番ヶ瀬慶次郎

蒼惶しく飛び込み熊、一通の封書を私の机の上に叩き付けたT君は握拳で横なぐりに涙を押し拭ひ

『此れを覽て呉れ』

驚いて椅子から跳ね揚つた私はアツ氣にとられて頓みには言葉も出ませんでした。

『國の弟が人を殺した』

日頃快活なT君の顏は蒼白く緊張し切つて一種の凄味をさへ帶びて居る、悲痛の面持ちである。

『エツ』と私も一言、尋常に中身を採り出す事の迂遠かしさから引裂く樣にして押し開き一氣に讀み下した、心臟は早鐘を打つて紙片は木の葉の樣に搖れて居る、それでも私は慰安す可き立場にある事を自覺して平靜を取り戻す可く少時瞑目した、そして今一度繰り返して一字一句丁寧に讀み行く裡にそれは誤つて友人を死に至らしめた事實を發見してホツトした。

筆跡はT君の妹である、別に新聞三面の切拔き一葉、二號活字の見出しが大きく脅かして居る。

某驛に勤務して居た同君の弟Mは同僚と休息時間に拳闘の眞似事をなし、鋭く突出した一撃が心窩部に衝突するやドーと倒れたのでMは驚いて抱き起したが氣息奄々辛ふじて一杯の水を欲する儘にMは走つて水を掬ひ同時に事務所に報告する事を忘れなかつた、驛長初め驛員の多數は周圍を取りまき看護につとめ、醫員の應急處置に一時意識を恢復したが約半時間にして遂に絶命した。Mはその場から檢事局に引かれた、日頃精勤にして友情濃やかなりし被加害者に對する同情は翕然として湧き起り目下前後策に付て鳩首協議中との意味である。

勿論人命に關する重大事件であるが、過失に因る傷害致死であると私は思ひました、畳て一鮮人が狩獵中誤つて友人を射殺した公判の事實を物語つて罰金刑で濟むだらふと慰めたが、然し死に依つて撼られたる周圍の震動は可なり酷い。被害者は獨りッ子で一家の糊口はその細腕に依つて辛ふじて支えられて居た。貧苦の陋屋からヘシ折られた主柱の下敷になつた老ひの兩親の悲痛の涙を思ひやり、且つは吾子が殺人の大罪人であると思ふ一途から激しき衝動に禍されて歳老ひたるT君の母親は失神狀態に陷り枕も上らぬ重態となつた。幼き妹の哀れな筆の跡は涙なくては讀めない程委曲を悉して居ます。

是れでは此方が危いと差し當りの旅費を惠むで其日の夜行で旅立たせる事にしました。

Mの戯れの一突きは一瞬にして幾多の人を那落の底に衝き落したのだと私も他事でなく暗い氣になりました。

約一ヶ月にして孤影悄然として立ち戻つたT氏は苦悶と焦慮と面攘れして別人の樣でありました。

判決は傷害致死罪で二ヶ年刑の宣告を受けたが情狀を酌量して二ヶ年間刑の執行を猶豫するとある

此の種の豫備知識のない私ではあり神聖なる判決に云々す可き筋のものでない、又既に控訴期間も經過した事であるが『過失』の二字の冠すると否とは其處に格段の相違があると思はれてならぬ、T氏の話では取調べに際して滑べらした『憤慨して突いた』と云ふ一言が此の重大なる分岐點を不利なる方面に伸展せしめたのらしい。日頃の親交と事件の發端が兒戯に屬し、何等殺意のあらふ筈はないが短慮の一徹からその時の心理狀態が餘り露骨に曝露されて居る。

Hの死屍は解剖に附せられた、生來の虚弱者で特に心臟病患を有して居た事實も發見せられたと云ふし、又肋骨が折れて居たと云ふ尤も肋骨骨折は否定されて、之れは季肋骨の遊離端を見誤つたのだと（餘りに非常識だが）

辯護士は頻に控訴をすゝめ是非無罪にしたいと云つたがMの母親は兎に角無事で（體が）歸宅を許され監獄にも這入らずにすむと云ふ事でそれ以上を欲せなかつたらしい、費用の嵩む點も又事件の最後の幕を急いで引かしむるに至つたと思はれる。

あたら有爲の一青年は傷害致死の前科を一生冠せられてしまつたのです、後年に至つて過失の事實を誰が辯護し呉れようぞ、Tの前身に暗憺たる血潮の汚點を連想せしめはしないかと思ひ至れば氣の毒でならぬ。

一瞬の突撃！それは戯れであつにせよ、一友をして幽明の境を劃然と截斷し、同時につながれる血に陷つてしまつた。人間の運命は何時もかゝる岐路に立つて居ても

は走つて水を拔び同時に警察所に報告する事を忘れなかつた、驛長初め驛員の多數は周圍を取りまき

にせよ、一友をして幽明の境を劃然と截斷し、同時につながれる血緣の多數を引きずつて苦の深淵に溺れしめた。

又一言の解釋から過失と有意の境界に於て一生を通じて重大なる罪科の判決に服さねばならぬ羽目に陷つてしまつた。人間の運命は何時もかゝる岐路に立つて居て其一擧手一投足から片言隻語にもその人の一生の禍福が分れる事を目のあたり觀せられては人生行路の難も又此處にもあると思はれてなりません。

のだと私も他事でなく暗い氣になりました。

毒でならぬ。

一瞬の突擊！それは戲れであつ

京城雜筆

白衣考

松田學鷗

朝鮮人の一般が、四季を通じて常に白き衣服を着る事に就ては、種々の傳說を聽かぬでもないが、畢竟是れ古來の風習を頑强に白守否墨守すると云ふべきのみで、他に何等理由の有るでは無い。世界いづのれ國にせよ、古代に於ける衣服は、原質其の儘、着色せぬものを用ゐ、其の染料の發見せらるゝに從ひ、種々なる色彩を加ふるに至つたもので、殊に紬、麻を以て衣服の重もなる原料と爲したる、日本、朝鮮、支那の如きは、原質自然の色、即ち白を用ゐたのは言ふまでも無い、左に先づ支那の文獻より、朝鮮に關する例證を拔載する。

一、魏志（今より約千三百年前の著）馬韓の條　其の民は土著にして種稙し、蠶桑を知り、緜布を作る、又衣は布袍、足は履革にして蹻蹻す（緜は即ち綿の字、今は棉花に用ゐるが古は帛と糸の合子として絹を稱した。布は麻、苧葛等の織物である）

一、同書、辰韓の條　土地肥美にして五穀及び稻に宜し、蠶桑を嗜り、縑（絹と麻とを合せ織りたる物）布を作る

一、同書、扶餘の條　衣は白を尚び、白布大袂、袍褲して草鞜を履す

一、隨書（今より約千二百八十年前の著）東夷傳　服色素を尚び、婦人辨髮頭を繞らし雜綵及珠を以て飾と爲す。

一、宋史（今より約五百八十年前の著）高麗の條　土女素服を尚ぶ。

一、明の董越の朝鮮賦（今より四百三十八年前の作）衣皆素白にして布縷多く麄、裳則ち離披して襤褸も亦疎。

是れに由つて觀るも、朝鮮にては、蠶絲、麻布の類が昔より作られ、服色の素白を尚びし事明瞭である。而して絹布は賦稅にも當て通貨にも亦代用せられた程であるから可なり多量に製出された物と想はれる（總督府出版、朝鮮史話）

◈江湖雜聞集

平田久雄

ゴタ〳〵つづきの勸信では、とう〳〵重役皆んな更迭して、名物男の平井さん、藤尾さん、いづれも罷めてしまつた。

○

藤尾さんは、他の或る會社に這入るとの噂もある『ナニ先生は、小鳥屋を開いても、立派に飯の食へる男ぢや』

○

今村螺炎先生、放送局の放送部長になるさうな。これは適任！恐らくコンナ良候補はまたと得られないだらう。放送ー螺炎。何んだか前世の約束でもあるやうな氣がする。

○

中村光吉氏、國際汽船の重役として、相も變らず元氣！、中村さんといふと、殖銀時代一年半に亘つて、毎日々々鰻ドンを食つたさうな、元氣旺盛！故あるかな。

○

鰻といへば、大倉鶴彥翁も『延命長壽はこれに限りやす』といつて、一日一度は屹度ペロリ。

○

石井光雄氏は、アレで仲々の讀書家ださうなが、便所に本箱と書見臺とをしつらえて、鼻をつまみ乍ら默讀などは、サテ〳〵御念の入つたこと。

○

韓相龍氏は、とてもキレイ好きで、掃除のことは仲々やかましい氏が列車旅行などすると、ボーイが『オイ君、氣をつけ給へ、今日は奇麗好きさんが乘つてるよ』

續判決餘錄

伊藤憲郎

生れ故郷の朝鮮へ高飛して來たが汽車より電報の方は早い、こちらの警官は豫て電報で逮捕方依頼を受けてゐたからその男は直ぐ捕へられた。

檢事局から裁判所へと事件が送られたが、なにせ、犯罪の場所は東京ゆゑ證人を調べやうにもまことにもどがしい。

東京にゐる日本人は鮮人でしたとばかりで名前は知らぬ、鮮人だから名前などは知つても知らんでも……個人的意識の缺如、そんな理由からか、こちらから問ふの裁判所へ證人訊問を詳細に頼んでもぴつたり來ぬ。

犯人は徹頭徹尾事件を否認して事件は益々こんがらがる。

考へ付いたのが即ち寫眞である東京の證人達は寫眞を見て正にこの男〳〵とうなづいた。

寫眞付の證人訊問調書は法廷に現はれてその男は一とたまりもなく泥を吐いた。

判事さんの素人寫眞も中々馬鹿にはならなんだ——こんなこと位で年末賞與は餘計に貰へもせぬが昔なら大岡美談で賞められやう。

京城雜筆

生存

私の夫は一昨年陰十月頃北間島に出稼に出發し私一人在家し家族と共に暮して居たところ生活が困難であるから、その男の居る村あたりへ酒賣りに往きました。

部落ではその男は善い人間だといふ評判なので、私は自分の苦しい事情を打ち明け助けて呉れと云つたところ、同人は私を可憐と思ひ金二十圓程出して呉れました。

そんなこんなで私は嬉しさの餘り寧ろ私の方から進んで……。

——公判調書にはこう書かれてある。

北間島から戻つた夫は怒つた、そして離縁をして妻と相手の男を裁判所に送つた——然し考へて見れば、性の遊戯と云ふこともあらうがより以上に生存の問題が潜むその後夫が告訴の取消をしたのは當然である。

里民の本人の境遇に同情するもの多し……こうも記錄に書かれてある。

貧しい山村、生に喘いで行はる事件、そうしてそれが法律に所謂姦通罪に觸るゝものであることに相違はないが……。

犯罪は都會に隠れ易く、村落に露はれ易い——都會にもこの種の事件はあらう、然し法廷に出ることは割に尠い。

二圓

豫て親交の間柄なる姜某被告人方に來訪するや被告人は同人に對し金二圓の貸與方を申込みしに同人は僅々六圓を所持するに過ぎざるを以て拒絶したる爲茲に被告人は同人を殺害して其所持金を奪取せんことを決意し……。

強盜殺人事件の判決の一節、犯人は支那パンの中に狐とりの毒藥を入れ山道を歩き乍ら被害者にすゝめ倒れた後素足で咽喉を踏みしめた——折柄の宵闇、最後に被害者の齒軋りを聞いたと自白してゐた。

社會の下層にもかく人々、そうして僅か金二圓の問題である。

金持の人達はほんとうかと嗟嘆するであらう、正に事實である。

死刑と云ふことに付ては昔からいろ〳〵に論じられてゐる、宗教的立場から又社會契約の觀念から廢止すべしと叫ばれる。

防貧といふことも考へねばならぬ、然し、如何に貧ゆゑとは云へ斯くの如き凶悪の徒は永しへに社會から隔離しなければならぬものではあるまいか。

そうして被害者の遺族の心中を察して見やう、唯では置かれぬと社會の人は賛成しやう。

寫眞

或る男が東京で悪事を働いて、

◇ひとりごと

吉田莊一

朝鐵伊藤さんのお住ゐは、南米倉町の景勝の地で、朝鮮神宮の大鳥居に近く、眼下に京城市街の大半を望むことが出來る、あの邊を散策すると、よく主人公が謠の一くさりを朗々とやつてるのを聞く▲あの俗謡で、筆をもつのを苦にしないのは、伊藤さんが第一人者だらう、書くのは實に早い、そして雄健暢達だ▲一寸見ると、豪傑型だが、原稿などは實に几帳面だ。

跡を留め急造の新浴場は往時の面影を見ることが出來ないであろふ。

露はれ易い――都會にもこの種の事件はあらう、然し法廷に出ることは割に尠い。

寫眞　或る男が東京で惡事を働いて、雄健暢達た▲一寸見ると、豪傑型だが、原稿などは實に几帳面だ。

京城雜筆

山陰飛脚旅行

橋本豐太郎

大社發午前十時頃の汽車に乘れば再び今市にて乘替へ、其夜十時半京都著にて直ちに東京行の特急列車に聯絡するから若し一日の閑あらば此行を試みらるゝも無益ではあるまい。

偖て大社の參拜を無事に終りて是から山陰線栗毛と洒落た面白かろふと思ふのは彼の宍道湖附近の景色である。松江市は其の最も景勝の地位を占めて居る。夫の茶道其他風流の道に於て芳名を遺されたる雲州侯の此處に居城せられたるは偶然でないと思ふ。今や若槻新總理大臣も亦此地に呱々の聲を擧げられたるを聞く。曾て愛吟せる雲井龍雄の詩に『駿之山參參之水、英雄起處地形好』の句があるが、若し山陰の勝地を訪はゞ松江を推すの外ないと思ふ。但間違つたら汽車旅行の皮相觀察として恕して貰ひたい。松江から少しく行くと安來驛がある。鰌すくいを連想せずに居られない。安來節の文句にある二神山は直ぐ驛前にある。盆景の一小山にして、ハゝア是れなる哉とうなづいた。其又次には米子驛がある、支線によりて境港に出るのであるが、同港は宍道湖の出口にありて山陰道唯一の良港だと云ふことである。惟ふに安來節の世上に流行するのは、蓋し此港に出入する船舶によりて宣傳せられたるのではあるまいか。

此處に一寸不思議の觀察がある、其れは出雲と越後に似寄りたる土音かある。一例を言へば（イ）と（エ）の區別がない、或學者の說に潮流の關係にて出雲半島より越後の海岸に遭難船の漂著することあるべしとの事だ。現に越後に出雲崎と云ふ港のあるは其れだとの說は果して眞なるや否やは暫らく學者の研究に讓るとしよう。彼の宍道湖が半島を擁して勝景なるが上に伯耆の大山が近く其の東北に聳へて湖上に倒影するのは大に美觀だといふことである。其の大山の傍には船上山あり、又名和驛のあるのを見て坐ろに南朝の忠臣が後醍醐帝を迎へ奉りし往事を追懷し、車中より遙に敬虔の念を其の地に馳せた。大山は海拔左まで高きにあらねど孤立せる一峻山にして雄大の觀がある。山嶺既に雪を頂きぬ。卽ち句あり、

深山には雪降る里の時雨哉

又鳥取を過ぎし頃より坐ろに吟懷を催しければ、

竹藪に一きわ目立つ紅葉かな
朝もやに茶の花白し軒近く
柿畑に案山子さみしく守りけり
南天の實や赤々と朝日影

鳥取地方には諸處に溫泉があるが、城の崎は其の名最も高い。地勢山間の溪流に沿ひ又海濱に近く浴客の旅情を慰むるに好適地である。但し最近の震災は頗る悲慘の跡を留め急造の新浴場は往時の面影を見ることが出來ないであろふ。

此處で若し時日の許す人には綾部驛から舞鶴線に乘替へ更に舞鶴より宮津線を取り丹後の天橋を見るは日本三景の一を語り得る譯で又新舞鶴の軍港も一見の價値があるだろふと思ふ。そして小濱線を經て敦賀に出れば北陸方面の旅行には最も都合が良い、慾むらくは此行其の餘裕を得ないので直ちに京都に夜行した。又の機會に於て再び賞紙の御邪魔することがあるであろふ。

◈博士の肉食

平田久雄

◎總督府醫院の桐原博士といふと、外科を受持つて、非常に評判の善かつた先生である。

◎昨年寡突然名古屋に轉任したので、一般から痛く惜まれてゐる

◎この桐原先生大の大食で、先づ四人分はペロリと平らげる。今一ッは野菜も魚肉も嫌ひで、年百年中牛肉と豚ばかり食べてゐる。家族はその あぶらッ濃いのに、『困るはねエ、且那樣には……』

◎ところで、當の桐原先生のいひ草がいゝ『獨逸の肉はコンナによくない、朝鮮は大にめぐまれてゐる、食はずんばあるべからずちや』と。

◎ところが、今度名古屋へ行くとキマルと『オイ名古屋は肉が高いぞ、今のうちにウント肉を食つて置かう』……いよ〳〵牛豚の分量がふえる。おまけに今日は洋食明日は支那料理と、濃厚なところを、家族を引きつれて毎日々々の巡禮。そこでまた『あゝ困るはネエ、うちの旦那樣には……』

〔二七〕

朝鮮で見た東京女

森　一郎

◇

朝鮮の各地を歩いて見ると、矢張り九州の女を一番多く見受ける。九州でも福岡あたりの所謂北九州の女は比較的少なく熊本鹿兒島長崎と云つた南部の女が多い、殊に長崎の女を私は一番多く見た。

私は元來九州の女を餘り好かなかつた。けれ共そうして段々と多くの機會に接して行く内長崎の女には一種のこまやかな情緒のある事を發見した。殊に稼業にある女等は絶對的客に盲從して行くと云つた色彩の濃厚な長崎女を到る處で私は知つた。稼業そのものに全く忠實である事から起る盲從のみでなく長崎女には男性に對して或一種の無抵抗主義と云つた樣な弱々しさが浸み込んで居る。

大阪を中心とする關西の女は獨特の優しさを持つて居るが、旅の空で見る女ではない。關西の女はあの混雜したセセこましいあの關西の地で見て始めて女の優しみを感ぜられるもので朝鮮等に來て見る關西の女は全くゼロである。

荒つぽいと云ふ人もあるが私は矢張り東京の女が好きだ。どうかした機會で東京者らしい女に出合ふと何んとも云えぬ懷かしみを感ぜさせられて了ふ。『ねつ、ねつ』とか『そうしちやつて頂戴』とかあの舌廻りのいゝ江戸辯で頻りと話し合つて居る聲を聞くと私は凡ての周圍を忘れて其女の語に耳を傾けて了ふのが常だ。

朝鮮には東京の女は尠ない。殊に地方へでも出たら全く姿を見せるものではない。朝鮮は田舍へ行けば行く程九州の女が繁殖して居る。私はどの位そうした朝鮮の片田舍で偶然東京の女と出合ふ機會に憧がれて居つたものか判らなかつた。

自分の故郷に對する慕しみと云ふ點から起る憧憬のみではない。私は東京の女の瀟洒としたスタイルと氣分と語を心から愛して居る。

放埒な生活を續けて居る頃京の祇園であの可愛らしい舞妓共の渦に浸つて見た事があつた。けれ共四五日經つと、あの長い舌で饒舌べる廻りくどい語が耳について、終ひには面倒臭くて腹が立つて來た。それ等に較べると東京の御酌共はサツパリとして氣分が違つて居る。まあ一言にして盡せば東京の女には輪廓のハツキリとした語と心と態度が備はつて居る。

◇

昨年の秋頃慶尚南道の忙しいを旅した時、蔚山の港で偶然東京の女に巡り合つた事がある。

どうも私には妙な癖があつて旅に出て足を止めた土地の宿に著いて、風呂に入つて晩餐を終ると先づ床に入つて疲れをゆつくり休めたらいゝのに、私は之れが出來ない。奈何に寒い夜でも先づ宿の胴衣の上にオーバーを引懸けて夜の街へ出る。そして其街の紅い灯を辿つて彼方此方と夜更くる迄彷徨する習慣になつて居る。

其代り必ず其土地々々で種々な女を發見する。之れが趣味かも知れぬが多少病的かとも考えられる。

丁度其調子で蔚山の夜の街を歩き廻つた揚句、場末の薄穢ない小料理店の二階で東京の女を發見した。

『そうでしよう、私始めからコチラ東京の方だと思つて居たわ、そう懷かしいわね』

東京の女獨特の親しみを兩の眼にあり〳〵と見せて、丁度東京に居つた頃に知己でゝもあつたかの樣な調子で話し懸けた。其女は東京と云ふても府下の八王子と云ふ絲場の生れで、淺草の千束町（有名な私娼窟）邊りにも居つたらしく、可成にそう云ふ方面の話を知つて居た。蔚山へ來て二年半になると云ふ。東京から一直線に蔚山へ賣られて來たので、東京と蔚山の外は何處も知らないと云ふ。なまり

易い他國の水に浸みて居ない丈け其女には東京者らしい東京の

しちやつたわね、ぢや、もう

『手紙ずけくれない、私字が

易い他國の水に浸みて居ない丈け其女には東京著らしい東京の氣分が判然と見えて居た。

『そうお、ちよいく此地に來られるんぢやないの、悲觀しちゃつたわね、ぢや、もういつ逢えるか判らないことね』

女は恁んな事を云ひながら翌朝小路の曲り角迄送つて來て、

『手紙寸けくれない、私宇が拙いけど出すわ、ねつ、きつとね』

私は不思議にも、之れから數日の間其女の事が思出されてならなかつた。勿論手紙も出さなかつたので、先方からも來る筈もなかつたが、それから二三ケ月經つて私は又蔚山迄行く用事が出來て來た。

そして宿へついた其夜私は其足で女の家を訪ねて見たが、女は半ケ月程前に釜山の綠町遊廓に鞍替えて行つた相であつた。

私は何んとなく惜しまれてならなかつた。東京と蔚山より他に知る處もない純粹の東京の女を、そうやつて彼方此方の水に浸らしたくないと思つた。あゝ云ふ女は轉々として、渡り歩く內、いつとはなく現在そこいら中にありふれた東京女の樣になつて了ふのではあるまいかと其時私は思つた。

實際東京女の彼方此方の水に染つたの位やり切れないものはない。京城でも山に積んで燃やして了ひたい位此雜種化した東京女が蠢いて居る。

それつ切り私も其女とは巡り合ふ機會もなかつたが、いつでも東京の女の話等が出ると、私は直ぐ蔚山の事を思ひ出して云ふた。

『ね、君、あゝ云つた純粹の東京女は、あのまゝそつと蔚山の樣な淋しい船着場に置いておいて、いつ迄もタツブリとした江戸情緒を含ましておきたかつたね』

連翹咲くころ

角田不案

父をしめび父を戀ふれば連翹はげに思出の花にてありけり
連翹の花の前にてしみじみとかの故鄉を思ひぬにけり
故鄉の父を思へる心より父の心は淋しかるべし
書ふかき家ぬちにこもりぽつちりとともる灯のあり心の奧に
連翹の花は雨よりはたしげく散りて實にこそ春たけてけれ
連翹の花咲きしより夜を降るその雨音の春を聞くこころ
折りて來し連翹の花を瓶にさし身をねそべれり疊の上に
閣を降る雨の音よろしながながと疊に投げし草臥れし身なり
風ふくに雨ふるに散る連翹にわりなくながる淚なりけり
連翹の花のこぼれし岩の上にまぶしく仰ぐひるの空なり
石叩き尾ふるところ山川の流れは淺し連翹の花
山川の底に日は照り連翹の花のここだくかたまりて流る
ちよろちよろと片より流る砂川のながれのあたり咲けり連翹
水泡わく日のぬくとさよ一面に連翹は咲く山川のほとり
連翹の花さきぬくき山川の流れ掬へり其の水の味
一瓶の酒とりいだす連翹の咲く山川の流れのほとり
連翹のさく山川に日にかざす瓶にみちたるその酒の色
空腹のしきりにいたり山にのむ白日の酒の醉ひのするどし
山の色大空の色酒杯にこまかにうつれ連翹の花
いよいよに醉はめぐれり山川に顏を洗へば手までもまつか

（一五、三、三）

京城つれつれ草

守屋三葉

○二月四日ゆくりなく全鮮巡禮の旅に出づ、朝鮮に來りて四年京城と釜山を汽車にて通へる外には殆んど知るところとてなければ行く先々の風俗人情そこばくの感興なきにしもあらず。

○五日新義州に着く、驛と鐵橋と安東一帶の風物十年の面影を宿して懷かし、さはれ新義州の發展こそ目さましけれ、其の昔一望の平野なりし驛と舊部落との間は今は大方軒をつらねて氣配そこはかとなく都めくめり、十年の昔、吾宿りて舊市街某旅館にあり時恰も仲秋月明の夜なり、長歌管弦家々に起り月光虫韻彼の曠野に溢れ、異郷孤獨哀愁殆んどたとふるに物なかりしを、今はいづちに彼の旅情を求めん、偉なる哉十年の歳月や。

○さしたる時間の餘裕とてもなければ自動車にて安東に向ふ、橋上の烈風骨に寒く、名にし負ふ鴨綠江など氷り塞して川とも見えず、唯一望の曠野とや言はんなど一筋の長路をすべり行くなり、橋畔の哨兵銃を按じて嚴しく稅關の官吏鵜の眼鷹の眼なるも國境景趣なりかし。

○いつも賑やかなる支那街なる哉、色とりどりに吊られたる商牌、塗られたる商舘、矢張り支那獨得の情趣を覺えて心にくし、折から舊節季前なり行き交ふ人馬絡繹として織るが如く管弦の響き賣子の聲實に繁昌なる事どもなり、ゆくりなく一商舘に入る、マッチを磨りて煙草をすゝめ手を引きて席を與へ茶を汲みて飲めよと言ふなり、うるさき仕草なれど愛想なき日本商人には學ぶべき事なりかし

○夜三橋といふ料亭に招かる、田舍には惜しき程の建物なれど藝者など何れ土地柄にや頗る勇敢ともすれば御客さんを引つころばすなり、まだ宵なるをしたゝかきこしめしたる飲む程に更け行くまゝに氣勢頓にすさまじく腕を撫して角力をとるあり聲もかれんばかりに所謂本場の鴨綠江節をうたひ警備の歌を唱ふ、むしろ『ドナル』と言はん、こゝにも國境第一線の氣分漂ふ。

○宿のお上さん粹な丸髷にて停車場迄送迎す、今の世には珍らしきことなれど支那と朝鮮と滿目これ異郷の唯中に滴らんばかりなる日本の丸髷を見る、いさゝか愚うもなし、さはれ茶代の加減など言ふは味なし、また來よとの政策など評するはもとより當らず。眞にこれ國境意識が生める同胞愛の一端なりかし。

今日では安岳方面は交通の便が開けて來て、生活必ずしも曩日の如

黄海道廻り

伊藤利三郎

夢金浦は久美浦より西北へ、十哩許を隔てた西海岸に在る。砂の色は稍黄色を帯びて居つて、いくらか質は悪いけれども、ヤハリ硝子原料になるといふので、大連の硝子會社の採集區域になつて居る

西方に連なつて居る低い山を越へて、之から夢金浦海岸へ出やうとするあたりはマダ開けてゐたい緩傾斜地の濶葉樹疎林で相當に面積の廣い平野である。大日本製糖會社が未墾地の貸下げを受けて、現に開拓して居る八百町歩もその邊である。そこから海岸へ出ると向ふに大きな象の形をした砂山が二つばかり浮き出て居るのを見受ける。

聞く所に依ると此の砂山は、風の烈しい時になると砂が吹揚られて、恰も龜の蠢動するやうに見えるとのことである。この邊一帯は海棠花を以て古來有名で、花の咲く頃には周圍の砂の黄色と、海の青色と共に一種の趣があるといふことである。

海の水も清澄ではあるけれども風が酷いので或は海水浴場としては、久美浦に劣りはせぬかと思はれる。

その邊の山地には近來特に野豬の出沒甚しく、一昨年（大正十三年）の如きは、七十餘頭を射留めたといふ事である。現に處々には猪の番小屋があつて、其襲來に備へて居るのを見るのは、一寸他で見られぬ圖である。

此の海岸一帯は地形上昔から漁業が盛んであつたが、近年殊に漁獲も多いので、漁民も次第に增加し、内地人漁家も相當に殖へて、今では夢金浦の如き相當な漁村として立つて居り、小學校も立派に出來て居るさうだ。

長淵附近は相當に廣い畑地で、農作物の收獲は地味の豐沃であるのと共に、莫大な數量に上るとのことである。

從つて住民の生活程度も豐かでなんとなく暢りとしたやうな感じがある。その邊は畑地一反歩十五六圓から三十圓見當が普通で、場所によると坪當り二、三錢で買へる處もあるとの話である。此頃は彼方にも此方にも水利組合ばやりで、産米增殖計畫當込みの畑の買占が盛に行はれる。海州方面の内地人も、大分纏めて其程度の畑を買ふたとのことであるが、どうか成功して呉れればよいがと思ふて居る。坪十錢としても千坪で百圓一萬坪買ふても漸く千圓程度に過ぎないから、少し纏めて買ふて自ら耕し自ら營むも、亦一興ではないか。

昔から一安岳、二長淵、三谷山と唱へられ、生活程度の最も安易な場所として、いつでもその例に引かれて居るとのことであるが、今日では安岳方面は交通の便が開けて來て、生活必ずしも曩日の如く樂でないやうに思はれるから、一谷山、二長淵、三安岳と變更した方が寧ろ適當ではあるまいか。

長淵附近に龍淵といふ處があるソコに在る池の名が卽ち地名で、小丘を廻らした方七八十間の物凄い深淵、滾々として盡きず岩底を潛つて流れる小川、流域數百町歩の水田は『呂氏龍を救ふ』の神話的傳説を以て、此地方の一名所となつて居る。

松禾溫泉は龍淵から十哩ばかり東の方に位して居つて山あり川あり、規模は小さいけれども周圍の情景如何にも閑雅で、一寸壇原、箱根の溫泉氣分がする。湯もナカナカ豐富で溫度も高い。若しもこんな場所が京城から二三時間の地點にあるとしたならば、どんなに繁盛するであらうかと、全く以て惜しい氣がする。

川原の水も白布を敷いたやうに綺麗で、夏になると水嵩さも增し鮎さへも捕れるとのことである。下流に漁師が朝日を浴びつゝ網を張つて居る有樣など、ナカ〳〵捨てがたい風情である。川に沿ふた小高い處には、程よく亭などの設があつて、其下に巨岩兀立し、松櫻など添色され、春なれば花見もでき秋なれば月見も悪くはないと思はれる。此處は朝鐵會社の信川溫泉から、自働車で西へ丁度一時間位の地點にあるから、その方面へ二日續きの休みでも利用して旅行せらるゝ諸君には、誠に格好な清遊の場所であらうと思ふ。

黄海道で山の名所といへば、黄海金剛の名がある長壽山と安岳の西方に在る九月山とである。九月山の連亘は、恰も屏風を引廻した

京城雜筆

やうに、南の方を限つては居るが個々の山の形は畫に描いた江原道の金剛山に略々似て居る。その附近へ來ると道路の兩側田畑の間に大きな『ドルメン』が點々して居るのを見受ける。露出して居るのもあれば、笠石が半ば出て居るのもある。暇があればそれ等を研究するのも、面白からうと思はれた

安岳溫泉は現に公衆用のものが數ケ所あり、又試掘中のものが二三ある。溫度は華氏八十二度、此附近にては最も高溫度と言はれて居る。

周圍が綺麗でないので、溫泉場らしい心地が薄いやうであるが今採掘中のものへ適當に施設したならば、或は相當呼物になりはせぬかと思はる。

安岳溫泉は溫泉としての價値が相當にあるやうに聞いて居つたけれども、平地の町の中のタヾの溫泉として見ると、大して期待程でもないやうである。

雲のやうな九月山を右手に見て際涯なき載寧平野を自動車が砂塵を後に駛る時、恰も映畫中の『ドイブ、シーン』も斯くやと思はれて何んだか『アラビヤ』の平原でも走つて居るやうな心地がする。

聞く處によると今年の載寧平野は非常の豐作で、上田では一反歩籾八九俵を收獲した所もあるとのことである、載寧江堤が修築されて河川の改修ができ、灌漑排水の便利が完全したならば、四十三万里の平野は、青波銀波の寶庫と化して、產米增殖の計畫に資する處が少なくなからうと察せらるゝ。

信川溫泉は、サスがに鐵道の便がある丈、施設萬端整ふて居つて氣持がよい。周圍の風景に幾分缺くる處はあるけれども、ヤハリ黃海道の溫泉としては、先づ一番に位するものといふてよからう。

近頃出來た堤防に近く櫻が植へられて、花の頃の棚引くとき、信川の町から溫泉附近へ蟠居して居る松山の翠と相對して、或は調和の取れた面白い光景を現出するに至るであらうか。

殊に遙か南の方は九月山の奇峰を『バック』として居るので、遠近の景色も亦惡いとはいへぬ。現在の鐵道終點信川の此頃の發展は驚くべきものであつて、此歲の穀物の取引高は既に百萬圓を突破したと唱へられて居る。近く黃海道にては一二を爭ふ繁華な都會になるであらうから、その時に及べば近い信川溫泉も、直接間接好き影響を受けて、相當に繁盛するであらうと思ふ。

海州は北に山を負ひ、南海に面して季候も大層穩であるから暢氣な場所のやうな氣がする。町の東山の麓に川原があつて、綺麗な水が流れて居り、其西岸は狹長くダラ〳〵坂となつて、樹林の間小樓點在せる處、鄙に稀なる風情がある。

「體黃海道は支那との距離が近いので、古來交通頻繁であつたが殊に海州は當時の開港地として、相當殷盛を極めたものゝ如く、今尙その時代を偲ぶことが出來るやうな、建物遺蹟などが處々にあるとのことである。

市街地の面積案外に廣く、北から南へ傾斜して展開して居る有樣は、一寸神戸の地形に似て居るやうな感じがないでもない。恨むらくは龍塘浦の漸くや二三百噸の舟を入るゝに足る位で、それも餘程沖へ碇泊するといふに至つては甚だ遺憾といふべく、今日の海州が辛ふじて昔の俤を地積に於てのみ留むるに過ぎないのも、之が爲めであらう。

北に聳へて居る首陽山は、周時代の伯夷叔齊蕨の故事を以て、名所の一として常に鄕黨の誇りとなつて居るやうであるが、生活の安易必ずしも幸福ならず、小にしては海州、大にしては黃海道が、遂に朝鮮の首陽山として世間から取殘さるゝ事の無いやうに、御用心が肝要である。

◈身代の養生

吉田莊一

○

京城新進の實業家Yさん、昨年の暮上京すると『君も岡山縣人だから』とて、日本ビールの社長馬越翁から忘年會に招ばれる。翁が岡山縣人であることはいふまでもない。

○

その席上で、馬越さんの挨拶曰く『私は今年八十二歲、もう四五日すると、八十三歲になるのである、ところが私は若い、私は元氣である。どこの宿に泊つても、女中が（旦那は六十四五でゐらツしやいますか）といふ、つまり養生がいゝんだ……』との口上。

○

そこで、あとで恭々しく翁の養生法といふのを質問すると『さよう、第一が精神の養生、第二が身體の養生。それにも一つある、これが肝要、曰く身代の養生！』

○

『へ、へ、身代の方も、養生法の一ッですか……』流石に馬越さんだけに、それらしい訓言だと、今更のやうに感歎久之してゐた。

くる處はあるけれども、ヤハリ黄　だ遺憾といふべく、今日の海州が　今更のやうに感歎久之してゐた。

織元から直賣

値段は安く地は厚く

セル
帶側
ネル
春著

萬朶をほこる
櫻花の下に
浮立つ春の
花見の衣裳

新荷着

あれやこれやの品定めに是非々々
御越しを御待ち致して居ります

京城明治町
梅 梅澤呉服店
電話本局 二三四三 二一五番
振替京城五七一八番

いつも新柄買よき店

買ふ人の氣になつて賣る店

茶と茶器と
は青々園へ
青々園茶舗
京城本町二丁目

市内明治町二丁目
内科
小兒科
中島病院
院長 中島貞信

西洋料理
支那料理
東京へお出での節はどうぞお立寄りください
東京芝區新櫻田町一七
泰明軒

市内永樂町二丁目
木戸齒科醫院
院長 木戸虎藏

市内明治町二ノ七五
利根川齒料醫院
院長 利根川清治郎

市内旭丁二丁目
外科
皮膚科
瀬戸病院
院長 瀬戸潔

市内鐘路一丁目
濱洋服店
電話光化門二四四

人生の幸福は健康より
建康それは蔘精の服用によつて解決します明日と云わず今日から而して人生の幸に向つて
（定價内用二千瓦入壹圓五十錢）
京城本町二丁目
総督府蔘精發賣元
貴生堂藥品店
電話本局一三八
振替京城七六一

高級
京染
（新柄見本到著）
京城本町三丁目
榮 まらぎ屋
電本三〇六八
振京五八三

市内吉野町一丁目
内科
小兒科
木村醫院
電話本局七二五

金剛山産松實松花應用菓

金剛飴

金剛煎餅　金剛山
金剛羊羹　金剛饅頭

金剛柏子（松の實鹽炒り）
金剛柏子菓（朝鮮式松の實菓子）

金剛おこし
金剛しるこ

京都市本城二丁目
亀屋商店
電話二十七番
本局四七五番

り愛人であった某女史の悲しそう
な寫眞まで添へてある。私が見

紅雀

金谷要作

◎冬の日には珍らしい暖い或る朝のことである。後架に入つて、悠々と用を達して居ると、軒端から落つる雪融けの點滴の音に混つてピョ〳〵と頻りに友を呼ぶ可憐な小鳥の聲がするので、後架の小窓を開けて見ると、軒端に延びた柿の小枝に、何處をはぐれたか一羽の紅雀がオリーブ色の體を朝風に震はせて、紅色の嘴も能う開かずに、ピョ〳〵と硝子戸の内の籠の鳥――一番の紅雀に何事か訴へて居るのであつた。

◎そこで硝子戸を開けて、籠を椽端に持出すと、直ぐ樣籠の上に飛んで來たので、靜かに遠廻しに家の中に追ひ込んで、遂々捕へてしまつた。

◎羞む乙女を抱擁する樣な觸感を與へる其の小さい體を籠の中に放すと、初對面の仲間と、見馴れぬ住家に喫驚して、暫く南京玉の樣な眼玉をキョト〳〵させて居たが、やがてピョ〳〵と二聲三聲高く鳴いて、若々しそうに一打羽ばたきをして、餌壺に飛んで行つた

◎私はアルプスのホスピッの坊さんが、可憐な小女を雪の中から救ひ上げた時の樣な敬虔な感情と曖昧屋の親爺がはからずも哀れな家出娘を手に入れた樣な貧婪な慾情に滿足して、兎も角も出勤したのである。

◎其の夕歸宅すると、いきなり女房が今朝捕へたあのはぐれ鳥を別の籠に移してもよろしいかといふので、尋ねると、雄鳥が新しい若鳥と馴れ合つて終つて、舊の雌鳥を嫌つて居るらしいとのことであつた。私は何事も唯に小鳥のことである。小鳥の小さい世界のことであると、寧ろ過敏なその心づかひを心中に笑つて、其の儘に打ち棄てゝ夕餉の卓に向つた。

◎食後茶をすゝりながら何氣なく新刊のグラフをひらいてみると三角愛の破綻と題して、某畫伯と某長者の令孃の華かな婚禮姿が目に止つた。そして傍の圓内には恨を呑んで死んだ畫伯の門下生であり愛人であつた某女史の悲しそうな寫眞まで添へてある。私が見入つて居るのを見た女房は、既に讀み知つて居たのであらう。『男は勝手、女が可愛想です』といつたなり、つれなさそうに默り込んで終つたので、私はこゝではじめてはぐれ込んだ若鳥を直ぐにも別居させ度いと申出た女房の眞意がのみこめた樣な氣がした。

◎女房の言葉にも答へず、私も暫く默り込んで居たが、やがてこつそりと茶の間を出て、鳥籠をのぞいて見ると、雄鳥はその赤マントの樣な胸毛に今朝はぐれ込んで來た若鳥を抱きかゝへる樣にして暖かそうに眠つて居るではないかそして舊の雌鳥は一段低い止り木に獨り淋しそうに寢もやらず居るではないか。

◎如何したものかと、暫時鳥籠の前に佇んで居た私は遂に心を決めて茶の間に引き返し、直ぐにも古籠を取り出す可く女房に命じたのである。

◇人のうわさ

平田久雄

◎三井の天野さん、謠は早くからやつてゐて、これは素人中の一流株。この外に碁、將棋、ゴルフといふ道樂がある。

◎交友の範圍が廣いので、道樂の範圍も年々擴張。この間も或友人と將棋を指すと、先方がヒドク上達してゐるので『これはいかん君とつき合ふには、どうしても定跡研究の必要がある』天野さん、また一ツ負ひ目が殖えて來た。

◎それでゐて、お店の方はドウかといへば、大低六時、七時まではやつてゐる。だから天野さんの氣樂な時間といふと、グッスリ寢た間の五六時間。

◎青木戒三氏が平壤の知事さんになつたが、これは寔に適任といふものがある。年中血眼でイガミ合つてゐるのが平壤の本色。そこへ笑ひ上戸の青木さんが行つて朝から晩まで、ワッハッハとやらうなら小火に龍吐水をぶつかけるやうなものだ。これは寔に妙。

◎商議評議員の川端さん、モト〳〵候補に立つのを嫌がつたのを丁子屋の鈴木さん、濱さんなどが主になつて、まア〳〵と押立てたところが出て見ると、人物といひ識見といひ、議論といひ、嶄然として頭角を拔いてゐるので、鈴木さん、濱さん『トウです、私たちの目鏡は？』

客舍漫筆

飯泉幹太

東萊から

二月十七日から廿七日迄、毎日晝と晩との宴會、中には時間がよければ二次會でも三次會でもとの招待此んな親切に出會はした事は生れて初めてなので何日もヅブ六に泥醉したのである。或る日の如きは晝から晩まで引續きの二つの宴會を濟まして兎に角行友の催された晩餐會に醉ばらつて臨んだのである。而して約二十分間も堂々（？）と挨拶して五十何人と云ふ主人側をお盃頂戴と二廻はりして怪氣焔を擧げた相である。所で翌日になつて此の三番目に出席したことすら憶へてないと云ふ泥醉振を發揮したのである。コンナ工合で毎日他人の頭を借りてる樣な氣持がして堪らない。ソコで之を療すため三月二日の夕此所に來て鳴戸旅館に靜養してるのである。之より先き手紙で閑靜の室をと賴んで置いたが客が多いので、ソンな贅澤も出來ず、昨秋我が守屋兼好法師（德夫氏）夫婦が舊婚を溫めたと云ふ梯子段側の七疊の室にチヾコまつて居るのである。處が此の室の受持女中はお秀さんと申し亡き妻と同じ名なので何となく親しみが出來て來た。おまけに五十才近い至極親切な婦人で、よく守屋夫婦や三井の住井さん夫婦の仲よさ振りを話して何にくれとなく旅情を慰めてくれた。

着後澄み切つた溫泉に浸り、俗塵を洗ひ、ウンと熟睡した勢か、約二十日目にヤツト自分の頭が還つて來た。

三月三日は私の五十三回の誕生日で、此の日は朝から十七ケ年間奉公した朝鮮銀行の行友に對し『退職に際して』と云ふ退職の挨拶を血と涙とを以て書いた。夫れから京城雜筆三月號を面白ろ可笑しく通讀したのでトウトウ晝食を食ふのを忘れてしまつた。

午後四時頃から有名な海雲臺溫泉を見物に出懸けたが道路が惡いばかりか何等の設備もないので直ぐ歸つて來た。之れから各方面に餘程金を入れて設備しなければ浴客の吸收は六ケ敷からうと思つた。

松本さん、私が三月號をおもしろく通覽した感想を少しばかり書かしていたゞきたいと存じます。勿論批評する柄でない事はよく存じて居りますホンの感想です。若し失禮の所があつてあなたの經營上に支障を來すとの恐れがありましたら削除して下さい。

三月號雜感

○時實さんの『本の香』誠にゆかしく拜讀いたしました。讀書癖のない私には何んだか小言でも云はれてる樣な氣がして堪りませんでした。然し何物か强いものを得た樣な感激を受けました。曩には挨拶の仕方を御敎へ下さいますし、何時もあなたは有益な敎訓を御示し下さいまして唯々感泣の外ありません。福岡市長になられてもドウカ引續き御投稿を願ひ上げます。

○今本さんの『或る書席』實に其の光景が眼の當り見える樣で、覺えず例の欠伸を張上げて獨笑しました。後で隣りの夫婦客がヒソ〳〵話してるを聞いて或は自分を笑つておるのではないかとキマリが惡くなりました。

○吉川さんの『女子羞恥至上論』私の樣な此の方面に鈍感な者を大變啓發さしていたゞいて誠にありがとう御座いました。

○伊藤さんの『判決餘錄』何時もながら面白く拜見しました。此んなに常識が圓滿に發達して初めて名裁判が出來るでせう。京城に越前守が再來したとの噂がありますが、キツ

トあなたの事でせう。

○中村さんの『商賣始めの記』實に痛快に拜讀しました。松本さんの商賣上のズルサ加減をコキ下す所など誠に手に入つたもので私も共鳴いたしました。御商賣御苦心の程萬々御察し申上げます。之れから戸袋など隈なく捜がさしてから電話をかける樣に家族に申付けて置きましたから御安心を願ひます。大將！私もこれから何にかの大將になりたいと存じます、何分よろしく。

○佐々木さんの『人生觀』あなたの樣な自己完成が出來た方でこそ皆がウーンと首肯しいろ〳〵と蒙を啓く事が出來るのです。ドウか此の後も有益な御投稿を願ひ上げます。

○おえんさんの『無駄書き』無駄書き所か實に徹底した悟りを開いていらつしやいます事ネー、夫れにまたドウしてアンナ垢ぬけのした上手の文章をお書きなさるの、あなたの若き燕はキット文學者で不知不識の間に同化されたのでせう。私は今の今まであなたを見損つて居りました、何とも申譯ありません實の所を白狀するとあなたと云ふ方はオキヤンで、面喰で、呑助で、煮ても燒いても喰へない江戸ッ子と許り思つて居りました。所があの文を見てからは群鶏の一鶴の如く、神の化身の如く、輪隨院の長兵紙の後胤の如く思はれてなりません、あなたも隨分古いおえんさんですから最早四十五六におなりでせう。私はマダ五十四才のやもめで子供は澤山ありますが一つ老いたる燕に……。

○松本さんの『夢』私の夢と寢言は天下既に定評がありますがドウして彼んなによく夢を寫し得たかと驚きました。あなたも屹度毎晩夢みる方でせう。私は彼れを讀んで寢たら早速銀行の金庫を破らうとする泥棒を捕まへた夢を見ました、而して其の泥棒が行員の某法學士で早く縛つてと大聲上げたので醒めました。

○水谷さんの『仕舞禮讃』おもしろく讀まされました。仕舞を各種運動遊戯に迄結び付けて宣傳する處など實に手に入つたものです餘裕と云ふか自書自讃と云ふか判りませんが何事も其所まで行かねば駄目だとつ〳〵感心いたしました。

○瀬戸さんの『物知り』私此所に來てから毎晩釜山から饅を取寄せて喰べて居ります。最早晩かくなつて來たので或は青砥の粉が必要かとも存じますが饅を食つて死ぬ樣なツマラぬ命なら喰はなくつても何んかで直ぐ死ぬ命とタラフグ食つて居ります。

○渡邊さんの『眞の雜筆』興味と教訓とを兼備へたもので不知不識讀んでる間に大變な物識になりました。

○今村さんの『おや！おや！おや!!』ホントにオヤ〳〵ですね、屁もない事をドウしてあんなにおもしろおかしく美文を書かれるでせう。一つ其のコツを教へて頂けませんか。

近作二首

古城梅溪

悼李一堂侯爽皐水大人瑤礎

一身捧國遠謨深。意氣堂々不可侵。此日何圖龍化去。慨然唱出武侯吟。

總督府ト紀元節佳辰表彰全道功勞者余蒙其選書感

葵衷未奏奉公誠。輿議慙傳善行名。恩賜酒杯何忍酌。老顏不覺淚縱横。

○伊藤さんの『敗影』あなたの創意と文章何時も感服しております。ドウです一ツ創作家になつては。

○伊藤さんの『黄海道廻り』紀行文としては實に得難い達意の文。而かも其の觀察の明敏にして正確なる只々敬服の外ありません、お蔭で黄海道の事は細大となく駄法螺を吹ける樣になりました。何れ其の内今村知事から褒狀が參りませう。

○井上さんの『新愁を載せて』涙を以て讀みました。私も十三人の子を持ちまして五人亡くしました。誠に御同情に堪へません。生後一ヶ年ならずの三女を亡くしたとき妻が馬鹿に泣いてばかり居て何と慰めても諦らめぬ丁度其のとき四女が胎内にあつて既に臨月だつたので、後から生れるから諦めろと親切の積りで妻を慰藉すると、死んだ子と生れる子とは違ひます、あなたは腹を痛めないからそんな薄情の事が云はれるでせうと反對に叱られて參つた事がありました。ドンなに子供が澤山あつても其の愛には變りはありません御察し申上げます。

○石川さんの編輯小話、私の文が長い標本として叱られましたが誠に恐縮に堪えません此の後は氣を付けます。然し箸がなくても刺味は指でも食べられますよ。

○廣江さんの『珍談漫筆』長恨綿々、自分の事を書かれてる樣で何んだか恥かしい感がいたしました。私の輕忽しいことは有名なもので、人を自宅に招待して置きながら夫れを家に話す事を忘れて宴會に出懸けたり、人の招待に一日早く出懸けて只梅まりが悪く無益な散財をした事などは枚擧に遑ありません。今度私が話しますがらドウカあなたの面白い筆で書いて下さいませんか、キット賣れますよ、賣れた金で雜筆社記者大會を開きませう

○高武さんの『印象に殘れる異國の少女』實に羨望の至りに堪えません。あなたはホントウにお仕合はせの方ですね、異國ならずとも隨分可愛がられるでせう。一ツ其のコツを内所に教へていただけませんでせうか。

○中島さんの『京城惜別』ドウしてあんなにうまく書けたものでせうとつくゞ感心いたしました。彼の自樂莊は今から十七年前韓國銀行假舍宅として約二ヶ年間私が住みました。彼の渡り廊下も其の當時私が造りました遺物です。彼の離座敷は私も書齊とし將た又友と徹宵痛飲ウヰスキー三本を平げて腰を拔かした想出多い所です。櫻の木も餘程植へ足しましたのです。『さらば自樂莊』は感殊に深く讀みました。

モット書きたいのですが石川さんに又長いとおこられるので此所らで筆を擱きます。

此の一ヶ月は初孫の顔見に東京から北海道に迄出懸けます、到る所から繪葉書を差上げます。

讀んだ書物

平田久雄

○近ごろ讀んだ書物の中で、愉快に思つたのは、松田學鶴先生の朝鮮史話第一編である。もとより史實を語るのだから無數の考證引用を試みてあるが、それでゐて平明流麗、殆ど卓を隔てゝ先生と坐談するが如し。少しも肩が凝らないで、たつぷりとした史的知識を享くることが出來る。總督府の印行になつてゐるが、願くば廣く市に出し、世の讀書家を喜ばすことにしたらドンナものだらう。

○『甕』といふ俳句雜誌を贈られた。モトは朝鮮紙に鐵筆で書いてあつたと思ふが、今は立派な印刷モノになつてゐる。題字が碧梧桐だから、内容もわかるだらう。摯實でいゝ雜誌である。

死の問題

井上要　二

○

私は幼少の時或先生より死といふ問題に就きて次のやうなことを聞かせられたことがある。『人間は生れる時に已に死といふことが定まつて居る。死は常に人を追ひかけて居る』と。その言を聞かされた私はその後死といふものは嫌なものではあるけれども、それに追ひかけられて追ひ付かれたならばその時は致し方はない死なねばならぬ時であると思ふて居つた。しかし又或時はそれと反對に死といふことにつきては次のやうに考へる方が至當であるやうに思ふた『人は死を追ひかけて居るのである、一刻々々と死に近づきつゝあるのである』と。其の後又次のやうに考へたこともある。『死は生と同時に定まれるもので追ひかけられるのでもなく、追ひ付くのでもない、生死は一體である、生の後に死があるでもない、死の前に生があるでもない、所謂宿命といふ語は生死一體といふことを語る語ではあるまいか』と。

○

死を追ひかけるやうな氣持のする場合は私は次の樣な場合だと思ふ。煩悶の末猫入らずを嚥下して死せんとする時、又は水に投じて死なんとする場合の如き、死に對して全力を擧げて居るが、然るに死に達せざることもある。如斯場合は死に追ひ付くことが出來ぬやうな感がする。これと反對に死が追ひかけて居る樣な氣持がする場合もある、即ち重態に陷れる病人が已に瀕死の狀態に際し時々刻々死の到れるを待つのみにて生につきては絶望であるが、それでも不思議に死が到來しないことがあるこれは死が追ひ付き得なかつた例だと思ふ。斯ることを種々なる點より考察する時私は人生は定命なりと考へたい。即ち死生は一體である、生ある者必ず死あり、死生の御に立ちては泰然として覺悟して居りたい、即ち人は死を追ふやうな罪惡を犯しては勿論ならないことは考ふるまでもないが、又死に追ひかけられる樣な感のある時能ふだけ死に追ひ付かれないやうに生を軍んじ、汲々として天壽を完ふするやうに心懸けたいと思ふ兎に角私は死といふことより超越して生きんと欲することに努めたいと思ふ。即ちその努力が人生の使命として最も尊き價値であると思ふ。乍併茲に一考を要することは生を尊重し生に對して努力することが餘りにその程度を越えて、生を貪るやうに立ち到る時は却て忌むべき厭ふ可き人生の醜態を發露することもある。私は今日までに生を貪る者が神佛に祈願して其の病を癒やさんが爲に迷信に陷り或は醫師の手腕を疑ひ、附添看護人が不親切なり不用意なりと罵る如きを見て、甚だ醜惡なる態度につきて餘りに其の病人の無智魯鈍なるに驚かされたることが一再でない。如斯は人間として餘り生に執著し、生を貪る爲に起る醜狀であると思ふ。私は如斯事は致したくないと考へて居る。

○

右に陳べた事はつまらないやうな事であるが私が常に考へて居る一端である。尚ほ生死の岐路に立ちたる問題は種々あるが別に稿を更めて書くことにしやう。

◈北九州の旅

井上　收

○

過日來北九州を歩いてゐます、内地はさすがに春暖です、野にも山にも紅梅白梅の早春の姿が伺はれます、殊に野に青々と萠ゆる麥の若芽には何とも云へない春の大地の微笑が躍動してゐます、世は全く春です、朝鮮はまだこの曙光に遭ふには間があることゝ思ひます。遙に御健康を念じます（二月廿二日）

○

昨夜博多に參りました、別府では梅が急に咲いたのに、こゝは霙まぢりの雨が降るといふ寒さです昨日水原模範場長の大工原博士が九大總長に當選しました、二三日この地方を視察して朝鮮へ歸りたいと思つてゐます、遙に御健康を念じます。過日御約束の人には途中から懇切な依頼狀を出して置きました（二月廿四日）

京城雜筆

自文自讃 天下之名文

石森久彌

仙臺の舊友に、拙著『朝鮮統治の批判』を贈つたら、その友から明治四十一年三月二十七日發行の東北中學校校友會雜誌を、おくつてよこした。ところが、その校友會雜誌には、余が校友會雜誌部委員として、椽大の筆を揮つた名文が掲げてある。中學三年の雜誌記者は對校短艇競漕の觀戰記を書いてゐる。その記事で見ると、自校が七艇身も勝つて、大いに戰捷の氣分を現はしたもので、一方對手校たる第一中學の選手にたいしては、武士のなさけを見せ、大に同情してゐるところである。その同情された、つまり敗軍の將で、小さくなつてゐる選手に總督府醫院の伊藤（正義）博士がゐる。とにかく大した名文で、今讀んでゐると、その時の氣分だけは、分るが今推こうしてもわからぬ文句があるには閉口だ。そして、その氣取つた書方は丁度、朝鮮の兩班が、妓生の前で、しやなり〳〵と扇の風を、入れるの風格がある、先づその名文をあげて、そろ〳〵約十八年前の名文の解剖をして見やうか。△點に御注意。

東中對一中競漕記

（略）午後四時、愈々競爭開かれんとす。見渡す一面狂せんとす天よ、地よ、海若立ち山鳴せんとす。弓矢八幡の冥福それ陣頭に、功を奏せんとする選手の身を護り給へ。赤、青、白、旗は飜々として、秋風に飜へり、源平檀の渾の戰は現出されぬ。義は泰山より重じとし、節は白頭山脈の四季つきせぬ雪とも比べん。フレーフレー東中選手!!!一發の號砲はなつた。

景翳々として、金龍松島灣頭に流る。憑陵殺々、風浙々、鮮明な瑠璃に、空は愈々冴えに〳〵、海は益々靜まりで、天に海あり、海に天あり。十萬の見物は、正に幽冥の境に昇つて金色の香、めでたき光を浴びて、潮音遠く鳴るあたりより漕ぎ來る、悠々の姿を見るあゝ思へば尊き〳〵その形姿ならずや。

見よや雄々しき海の神を、みな載せて、海の百寶充ちに充たせて讃美の曲を奏でつつ、汪洋の海に來るらし、雄々しき影。若き心踊らずや!!!。

將、即ちコックスは、聲を限りに或は叫び、或は叱し、悲哀となり、慘憺となる。卒は今は先途と死に物狂ひ。百匡の竅穴、氣慨間々。海潮は鳴動し、逆奔せんとす幽遠の勢狀は殺氣濛々、血と肉とオールは凍つてビフテキを生ず。夕陽に照された顏は凄い!!。

第二の號砲は海面を傳へり。赤は決勝點に入れり。東中勝てり七艇身!!!。

萬歲は海汲を破れり。吾れ一中の爲めに衷心氣の毒に堪へず。吊戰破れては萬事は休せよ。孤城は遂に支ふる事能はざりしなり。周歲の苦練の果は泡となりぬ。吁々人臣忠臺の節、汝が國も好く戰へり。其の國難に殉ぜし士は、幾千代かけて香ばしく、汝の護國の鬼青史にのりて傳はらん。自個に厚く、他山の石に薄きが如きは、我の欲する所にあらず。汝が義士をも吊はん。

汝の撰手の心中察するに餘りあり。天乎天にあらず。既往は追ふべからず、唯奮鬪せよ。

× × ×

即ち憑陵殺々、風浙々は習ひたての漢文を利用してゐるが、悲哀となり慘憺となるは、一寸名句で百匡の竅穴、氣慨間々は拙者自ら餘りにむづかしいと嘆息する。幽遠の勢狀に至つて驚異の眼を張り海汲を破り、自個の個の字に閉口したが、既往は追ふ可らず唯奮鬪せよでとどめをさした處なんか、われ乍ら感心した。それでも景翳々として金龍松島灣頭に流るなどは餘程蘇峰張りのところも見られる。以上十八年前の名文を紹介する事如件。

◈恐しい記憶

平田久雄

京城日々の戸田雨飄君が、俳句一萬句集を作るため、殖銀森さんへ句を貰ひに行く▲『どうも自信がないので……』森さん氣の毒さうにことわる▲二三日經つて、このことを今村螺炎氏に話すと『なあに森さんの句なら、僕があげる、少くも名句が三四十はある、君見給へ斯うだ』先生宙に覺えてゐて片端から書く。雨飄君『ウーン』

續我體内の虫

木浦　福田有造

◇

其後の虫の生活狀態は依然としてつまらないものだ。新しい年が來ても、十二月の暮の忙しい時が來ても……ノンキにしてゐるのが虫の特徴らしい。虫は雜筆に原稿を書いて呉れとたのまれもしないし、そんな大家でもないのだ。けれど書けと云へば書く、或は賴まれて原稿の催促をされたればキット書かなくだろう。

◇

どうせ一筋縄でゆかないものだからもてあますは當然過ぎるほど當然だ。けれども雜筆の執筆者には虫退治の良藥や教導をして呉れる特志家はないらしい尤も十二月號の雜筆に書いたんで誰れもごらんにならず、どうせそんなくだらない虫の生息してゐる男なら變妙なおとこに違いないと相手にされないならばそれ迄だ……と獨り憤慨しても何にもならない。どうせ此の世のなかはキリストぢやないが豫言者はその鄕土に入れられないと云ふ話だから、まア虫もキリストを氣取るとせんかとあきらめても見る。

こんな事を云ふが虫の癖だと友達に云つたらばそうだと云つた。

◇

虫の一年間の生活は如何なものだつたか、何等新しい刺激もなく、さればと云つて感奮するでもなく又勉强するでもなく暮して來てしまつた。發展を夢みるでもなく尙ほ更ら面白くもなく、可笑しくもなく、さればと云つて泣いて女々しい事を云つたのでもなく考へて見れば意氣地のないこんな馬鹿々々しい事があろうか。然し虫は一寸も悲しまないんだ。

それが造化の戯れでもソコに虫の得體の知れぬ好味があるんだと激賞したい。誰も激賞しないから虫自ら云ふんだ。

◇

虫が悶殺の苦しみから逃避しようと宗教へ走つた、何等恩惠にも接しなかつた。さうして迷ひ出た行衛も知れぬ旅に放浪した。デカタンとかメランコリーとか時には胸に湧いて悲しんだけれども何にもならない、過去の夢だ〳〵。

虫の半生は人生の或る經過として見れば不滿にも思はないけれども滿足はして居ない。

誘ふ水あらば何處へでも放浪の旅へ出るかも知れない。虫先生さえ承知すれば。

◇

虫はとう〳〵誘ふ水があつたんでゴルフに走つた、虫はいゝ氣持でクラブをもつてリンクに久振りにたつた。極めてのんびりした運動で尤大なるリンクに天然の景色をとり入れ大氣を呼吸して獨りでやる時には虫も沈默を守つてゐて呉れたのでうれしかつた。

スキーもやつた、あの大自然の豪壯に打たれつゝ高いスロープの上から滑り落ちる時は實際スキーの滑つてゆく音と耳をかすめる風の外は何んにも聞へない、その時こそ虫はぢやない人間は迚も眞面目になり如何なる人間でも滑り落ちる時には外のことなど考へて居ない。ゴルフだつてスキーだつていくらやつても上達せず、そうかと云つても下手の『横好き』と酉落れる程の下手でもなく實際どつちつかずと云ふのです。

虫が生息してゐる以上致方がありますまい。得體の知れぬ生體を維持することの如何に虫の强さと弱さがあるか。良藥は口に辛しと云ふ事がある、淺田飴なら良藥で口に甘いとのことだ成る丈ならば變屈者でも甘い良藥を服用させてもらいたい、そうしないと折角の藥も甘くないと飲まないと教導をして呉れる人に對して親切を無にすることになるから。

虫は相變らず！である。

ブルドッグ

小瀧元司

日清戰爭當時支那人は日本の馬は猛獸だと云ふて非常に怖れたそうですが、どうも馬許りではなく日本の家畜は氣が荒いかと思ひます。現に折角外國種牡馬を大金を投じて輸入しながら一旦日本人の手にかかると荒馬になるのが多い一寸した事に驚き、蹴り、嚙み、跳ねると云ふ有樣で、つまり日本人は家畜愛護の觀念が乏しいのと教養方法がわるいのではないかと思ひます。

田舍路でよく見る處ですが、坂路で荷が重いから汗水たらして引張り揚げようとしても容易に動きませんから馬が止まることがあるそうしたら最後馬子が其邊から棒切れを拾ひ、思ふさま馬の御尻を打ったり甚だしきは處嫌はず打ちのめしたりしてるではありませんか。そこへゆくと支那人は決して打たない、打つべき音のみをさせ勉强せんと打つかも知れぬぞと注意するにとどまる。現に支那滿洲を旅行して見るに、十二三歲位の小兒が野飼の家畜十數頭の番人をして巧みに操縱してるのを見ます甚しきは牛馬豚を混へてる事さへある、又野路の馬車にしても牛馬を混役して何等の喧騷もなく巧みに操るを見ます。之は日本では到底見られぬ圖です。犬にしても同樣で、外國種を輸入すれば初めは從順だけれどもだんだん牛馬同樣猛犬にして終ふことが多い、此のことにつき外國人達は呆れて居るそうです。都は人も多く自然人馴れて居るからめつたにないが、田舍犬と來た日にや全然訓練をしてないから野生的となつて旅行者を困らする事が多い。此種從順なる動物をして漸次猛獸的に變化せしむると否とは或は國民性の然らしむる處かと思ひます。古來思ひ遣りを以て外人に誇る日本人の恥ではないかと思ふのであります。私も犬が大好きで私の行く處必ず犬が伴はれます、是は狩獵の目的でなく愛犬と番犬ですが、前にも申しました通り段々猛犬化するのでどうも不思議でたまりません。私が是丈け可愛がつてやるのにと思ひましていろいろ研究してみると何でもありません下女の仕打の惡いことが分りました。いくら教へて置いても面倒臭ひものだから飼育の方法を誤つて居たので誠に弱りました。然るに私の宅で今日迄五回も泥棒に這入られましてから下女達も初めて番犬の必要を感ずる樣になりまして幾分は愛護せねばならず又犬の御蔭で賊を防ぐことが出來ると思ふ樣になりましたけれども、まだまだ油斷なりませんし、犬の爲めに付き切りもならず、一層の事不親切をすれば家人と雖も或る程度迄用捨せぬ『ブルドッグ』を求むるに如かずと考へまして漸く手に入れましたのは純英國種と云ふて居りますが、どうですか分りませんが、牡の生後五十日ばかりのを手に入れトミーの子でしから『トム』と名付けましたが、今では立派な親父になりました。夫から昨年晩夏牝『バーツ』を求め、漸く牝牡揃ひました。又一頭は『セッター』種巨軀の『エル』が居ります。そこで『エル』をして裏木戸方面より表門を守らしめ、庭はブル公二頭を放し飼とし、守衛の役を務めさして置きますが、此防備方法を執りましてから一切泥的の厄を免れました。是に就て面白い御話があります。昨年の秋で其日は日曜でしたから私も居りましたし『トム』を放して置きましたのでしたが、突然『トム』が咆聲猛く中庭の土塀を目かけて突進しましたから、どうしたんだと思ふ間もなく『助けて呉れー助けて呉れー』と鋭い聲が聞へましたから、只事ならずと、其方面に駈け付けて見ると驚きました空氣銃を持つた二十歲計りの青年に向つて猛然として襲撃してるではありませんか。是れは大變と棒切れを拾ひブル公に一打を加へ、漸く取鎭めましたけれども其時已に青年の向脛には可なりひどい負傷がありましたから『君がわるい無斷で他人の庭園に侵入するからだ』と云ふては見たものゝ、如何にも氣の毒になりて種々手當をしてやりました。此例を申せば數限りもありませんが、飼ひ樣によりては決して戰鬪のみを好む動物でなく、馴練宜しきを得れば最も扱ひ易い從順なる動物の一に數ふることが出來ると思ひます。つまり其性忠實且つ怜悧ですから、親切にしてやりさいすれば何でもあ

りません。然るに極に證の自由を

湖南雜記

佐々木久松

△

裡里といふ所は、東京の郊外の樣な所である。

道が惡るい事、山が切りひらかれて、後から後からと家が立つて行くこと、割合に洋館建の多い事、町の割合に藝者の數の多い事、遊び客が土地の人より旅の人が多い事、等々。

全州は家數町である。――東京で謂へば麴町の樣な所である。何所となく落ち付いて居る。春雨が降つたら杉垣に鶯でも啼き相な所である。

群山は深川だ。米藏が並んで、町並がきたなくて、活氣があつて、見たよりも實力のあり相な所だ。

△

何とか道出身者の名簿を作ると謂ふので訪問を受ける。訪問といふよりも援助を强制せらるるのである。

膨張する新日本の先登に立つて活動する人達が何縣の出身とか何道に籍があるといふ樣な小さなサークルを作つて行つて果して日本の植民地經營がうまく行くかどうかといふことを疑ふ。

理屈から考へて見てもサークルは心の相似形によつて出來るべきもので出身地の如何に依つて出來るべきものではないと思ふ。

りません。然るに紐に體の自由を束縛されてるを奇貨とし、種々の惡戲をするから一朝放した節は承知しません、私の處の下女杯は着物の袖を全部とられたことは一再に止まりません。他の犬にして體軀倭小を侮り飛びかかりでもしたらたまりません、直ちにどつかへ喰ひ付いて放しません。斯ふ云ふ風ですから私は番犬として是に越すものなく愛犬としても體格に容貌に其態度の堂々たる點に於て此の種に及ぶものが尠いかと思ひます。若しそれ勇氣に至つては犬族中の王とするも過言でないかと思ひます。近年大阪方面でも非常の流行で天下茶屋邊に彷徨ふて種牡として市を利して居るのが一回の交尾料六枚百圓杯と云ふて居ります。又生後四ヶ月位の小犬に對し毛色も不問（昨今毛色よりは系統と由緒を選ぶようです）一頭三百乃至四百圓を惜し氣もなく放り出して三頭乃至四頭位を曳いて歸阪する樣な譯です。そんな商賣的は別として泥棒の多い京城杯では雜筆社寄稿各位も一頭位づつ御飼ひになつては如何でせうか。

◈盛んな別宴

吉田莊一

公會堂に於ける時實前知事の送別會は、近來嘗てない大盛會であつたが、本町本城屋の本吉氏の自作鴨綠江節、大垣金陵氏の詩吟、金東完氏の謠曲羽衣――など續出し主客とも逸興淋漓といふ有樣▲殊に十八日朝の京城驛はまた何千といふ見送人で『エライ人氣だなア』『しかし、感慨無量だらう』など、其所此所で囁かれてゐた。

松吹く風

森悟一

今日といふ今日は例の俄雨にも逢はず、一日汗ばみた狩倉の輕い勞れを脇息に凭れて、欄干近く居ざり出た大田資長（道灌）の晴れやかな額を、初夏の夕風は無心に撫でた。

江戸城をはじめ河越、岩槻、鉢形と一代の内に九城迄築き上げて名譽の弓矢と聞えたる資長も、此松山城を築き上げたとき程、心地よく思つたことはなかつた、さしたる規模ではないが此城ばかりは何處に一つ批點を打たれぬ所信の下に完成されたのみならず、多年傾倒し來つた自分の築城學も將に之によりて大成されたかのように考えられ、其當座は愉悦の眉を開いて、御機嫌此上もない樣子に見えた。

朝夕、老松の梢遙かに仰がゝ天守の棟には自分の魂がその儘封じ込まれてある、難攻不落の名城として此松山城は管領上杉家の尤も頼母しき藩屏たると共に、之れが執政たる自分の子孫も、百世の下に顧食し得る一生懸命の地たることを深〳〵確信して疑はなかつたのである。

いつしか呼ばれた短繁の、淡い灯影には其日の杯盤が、つぎ〳〵に運ばれて居た。小姓に酌を執らせた資長は、自分の築城術の大成と、此城塞が入神の傑作たる出來榮えに想倒し、今更ながら自分一人で滿足して居る位では頗る喰足らぬ心の不滿を感じ出したのである、臣下のお追從には無論聞き飽いた、同僚の讃嘆位では面白くない、もつと〳〵廣く、遠く、天下の耳目に大きな衝動を與へたい。それが嬲て此名城の實質と、道灌一流（一名持資流）の軍法とを宣傳する所以であると思はれた。

かく案じ入つては、後年、猿師に路なひて將軍義政を驚倒せしめたる程の智慧者も、さすがに輕い焦燥を感ぜざるを得なかつた、口に運ぶ杯もさながら水の樣な味である、日頃、かゝる折にともすれば口吟まるゝ歌枕も、今日は頓と興に乘つて來ようとも覺えぬ、啞の樣に默した小姓が慇懃に馬むる酌に、更に幾杯を重ねたが、それすら全くの夢心地であつた、席に居合せた二三の臣下も、此日程放心し切つた主人の姿を見上げたことはなかつた。

『智者も魅入られては呆氣以上』と、泌々感じたか、それとも『嵐の前の沈默』とでも思ふたか、いづれ觸らぬ神に祟りなしと觀念した一座は、霎時澄み切つた空の樣な靜寂が續くのみであつた。

折柄、兀如として吹き起つた一陣の夕風が、簾の裾を一二度バタ〳〵と煽り上げたと思ふ間もなく突嗟の裡に悉く座上の灯を奪ひ去つたのであつた。

『呀ッ！』と叫んだ二三の人影が自分の失策のように立上つて入り亂れ、次の間に消え去つた後には、雨の松風のみが颯々として、宵月を浴びた薄い樹影を青疊の上へ長々と横えて居る。

この瞬間にさながら惡夢から醒めたような眼を、キッと睜いた資長の頬の上には性來の智慧の光が輝き渡つた『これだッ』と叫んだ心の囁きが次の瞬間には、ニヤリと會心の微笑となつて居たことを闇はあやなし、恐らく認めた人は一人も居なかつたであらう。

翌日、朝またき、一館の立札が城の東門に高々と掲げられた、曰く『此城に難を加ふる者あらば、重賞を以て之れを謝せん』云々の趣旨が、墨痕鮮やかに道行く人の注意を引いて居た。

二三日を經ての或日であつた。資長は一間に引籠つて嗜みの翰墨に親んで居た、恐らく碎玉類題かそれとも嘉京集の推敲、彫琢にその霽勃たる雅懷を漏らして居たのであらう。

『殿、御意を得まする』と、敷居際に平伏した分別盛りの侍を頂越しに見下した資長の腰から上は徐ろに脊後に捻向けられた。

『御立札への批判、恐れながらお聞きに……』

皆まで言はせず資長は、

『なんと、批判？自體誰人が……何んとあつた？』

『それがソノ如何にも取止めもない噂のやうに心得えまするので、ありやうは申上ぐも笑止の沙汰と考えられまする』

『構はぬ、此松山の繩張への批判とあらば、資長謹んで承はら

う、あり様に申せ!!』

『ハッ、何處に一ッ批難の打てぬ天晴の名城とは見受くるが……唯一ッの缺點は、あの大手搦手に亭々として聳ゆる松の樹奴そうに御座りまする』

『何、松の樹?』資長は如何にも怪訝そうに張切つた意氣を拔いたやうである。

『その松の樹が何んとした?……』

『不斷の松風が、細作(間者)の夜込に此上もない手引そうに考えらるゝとのことに御座りまする!』

嚙んで吐き出すやうに言つてのけた侍は、兜ずれのした額越しに主人の容子を覗ふたのである。

『如何樣……細作の忍びになら……』

暫らく小首を傾けて居た資長はやがて居住ひを正して開き直つた

『至極の批判の樣に聞ゆる。して其御人は何處の誰人か?必定城内へ招じてあらう、直々の眼通りに於て兎角の御指南に預りたい、案内せい!!』

今にも立上らん氣生に、侍は狼狽の膝頭をトン〳〵と漸めた。

『殿ッ、待たせられい』

『ナント、如何致した?』

此に於て侍は、批判の當人が立合の奉行に囁いた袂を振切つて、其儘風のやうに立去つた次第を仔細に說明してッと膏汗を拭ふた

『據ない……惜しいことを致したなア、如何なる風體の御人であつた?』

『僧とも俗ともつかぬ異形の人物とのみ承つて御座る、如何樣殿のお繩に批判を下す樣の御人は、大馬鹿か、さなくば恐らく凡下の者とは思へぬ愛宕明神の化身であらうとの噂とり〴〵に御座りまする』

この間、資長の頭のなかには、其夜寢室の奥深くへ呼んで密かに内命をドした腹心の間者の、闇に落ちたる針一本見遁すまじき鋭い頬魂や、骨張つた肩のあたりのいかにもゴツ〳〵して居るところなどを、あり〳〵と映し出して暫らく瞑目をつゞけて居た。

十四の春

おえん

思ひ出すと丁度私の十四の春でした。

姉さんに連れられて店廻りをしてもらつて、これで一人前の藝者に成つたのだと思ふと、何んだか嬉しいやら何んと云つていゝやらその時の氣持ちつたらありやしないのよ。

今晩から一人でお座敷を勤めなきやならないかと思ふと、それもおつかない樣だし、若しお客樣が御注文の三味が彈けるかしら、知つてゐるものを云つて下さるだらうかなぞといろ〳〵の心配が次から次へ出て來て、鏡臺の前で五時頃までもぢ〳〵してゐたら姉さんにどなり付けられた事もありましたつけ。そんなに笑はなくともよくつてよ。貴郎が話をしろとおつしやるから聞かすんですよ。エ、私等の樣な海千山千もこんな初心な時代があつたんですもの。何ですつて?××の話をしろつて?そりやあ皆樣の前でしどいわ……よごさんす、思ひ切つて話しませうこれも昔の罪ほろぼしよ。

さうですわひろめをしてから十日もたちましたかしら、まだ一度も行かない待合からの電話でお客樣はお存じだから直ぐにとでしよだから大急ぎで身拵へをして出かけたの。そしてそのお客樣はどなただらうと思ひながらお座敷に通ると姉樣もゐるんでしよ、お客樣も二日程前に會つた人なんでしよそしたらねそのお客つたら姉さんに『オイどうだらうお前から耳に入れたら』と二三度小聲で話し合つてゐたわよ、自分の事を云はれてゐると云ふ事がわかんないもんだからすましてゐると、姉さんがね『一寸』と云つた時には思はず水でも掛けられた樣にヒヤリとしてね、次の間に行くとその時ばかしは姉さんぢやアなかつたわよ、いやにていねいに『すまないけどもねたのみがあるんだけど聞いてくれない。お願ひだから』と云はれりや『エ、姉樣どんな事』としか返事が出來なかつたの。したらね『いゝ且那なんだから承知しておくれ、悪い樣にはしないから』

兼々承知はしてゐたんですが何んだかその時になると、やれイ、且那だとか、私の願ひを聞いてくれだの、なんて社會だらうと思つても仕方がないんでせう。笑はないで下さいな。今はきまりが悪い年でもないですけど、その時ばかしは……眼をつむつて寢たふりをしてよつぴて苦しい思ひをしましたよ、だけどその時の事と其の人はわすれられないわよ。イエほんとおのろけじやなくつてよ。

人生

平山政十

人の現世に在るは、恰も俳優が舞臺に在つて種々の人物に扮飾して劇を演ずるのと同一である、或者は帝王となつて現はれ、或者は宰官となつて現はれ、或者は賤奴となつて現はれ、學者となつて現はれ、或者は貴族となつて現はれる者もあれば商人となつて現はれる者もあり農夫となつて現れる者もあれば、軍人となつて現はれる者もあり、種々の方面に種々の身分を扮飾して、種々の技を演じてゐる。ソハ人間が世に在つて生存を營むには何らでも社會と云ふものを構成しなければならないから、其の職業身分に區別があるのは神……創造主の配劑である。ダカラ人がこの世の舞臺に立つて社會的生活をなす間は、帝王でも、賤奴でも、農爺でも工夫でも各々その割り當てられた役割に就いて、其の天職を盡さねばならぬ。

唯夫れ眞面目にして正直に其の天職に忠實であつたらこの世に居る時から居食住を與へられ而して眞の給料は樂屋に入つて休息する時、働き振りの如何に由つて評決せらるゝの規定である。此の時に方つては帝王と雖も不眞面目にして其の責務を盡さないなら、之れに對する制裁を受けずには濟まぬのである。賤奴と雖も忠實にその任務を盡した者には、その働に相當した報酬を得るのである。左れば富貴何の羨む所ぞ貧賤何の悲しむ所ぞ、ソハ唯暫世の舞臺にあつて劇を演じてゐるのである、而して劇は永久に續くけれども演者は永久に舞臺に居ない、同一の技を異る人が交る代る演じて去る、技を演じてゐる間は眞に一瞬に過ぎないのである、須臾にして劇を止めて樂屋の裡に入らねばならぬ、而してその入るに當りてや、早くより舞臺に現はれて晩く樂屋に入る者もあれば、晩く舞臺に現はれて早く樂屋に入る者もある、ソハ脚本創作者の定むるところに從ふのみ。その樂屋に入るの時こそ異れ、早晩入らなくてはならない事は極り切つてゐるのである、決して永久舞臺面に居ることは許されない。嗚呼この樂屋、即ち我が現世の舞臺を去つて休安を得べき樂屋、この樂屋とは何物であらう。

古の哲人は人のこの世に居る有樣を以て恐るべき深淵に向つて旅行を餘儀なくせられて居るのと同一であると云つて居る。今夫れ海洋萬里水天髣髴たるの處に於て黑煙空を卷き、笛聲幽かに聞ゆるものは云ふまでもない汽船である、而して船中數多乘客の中には帝王あり、宰官あり、英雄あり、豪傑あり、智者もあれば、學者もある、貴族もあれば賤奴もあつて、互に大言壯語を放つて雜談に耽つて居る。一人あり、船中數多の乘客に向つてその出帆の港を問ひたるに、衆客呆然として知らないと答へた、再び現在の航路を問ひたるに彼等復た同じく知らないと云ふ、仍て三度その着すべき目的地を問ひたるに彼等は無關心の態度を執つて復た同じく知らないと答へた。コハ一場の假設談に過ぎないのであるが、若しも之れを事實とすれば彼等船客は何者であらう、少くとも常識を欠いで居る者と云ふ事が出來る。

顧ふに人間の生涯は恰も地球と云ふ巨船に乘つて五十年間の長途の航海をなしつゝあるものではあるまいか。而して數多乘組の客の中には帝王あり宰官あり、英雄あり、豪傑あり、智者もあれば學者もある、貴族もあれば賤奴もあるけれども其の出發の地點に就いて、又た現に航行しつゝある方向と經緯度とに就いて、將たその到著すべき地點に就いて明快なる答案を提出し得る者が幾人あらう。支那の孔子も我等と同じく乘組員の一人であつた、彼は弟子の質問に

答へて『未知生焉知死』と云つた。即ち出發の港も到著の地點も彼にあつては不可解であつた高僧一休も又た同じく同乘船客の一人であつた彼が死に臨んだ時或る人遺言を促したところ、流石禪僧だけあつて天眞僞らない言を放つた『死にともない』と云つたとか。彼も亦到着すべき港を知らなかつた一人である。無神論者のかのミルも、我等と同じ乘客の一員であつたのである、彼は一日讀書の際偶然死の問題に逢着した時、失望の末、我れ知らず讀みゝあつたその書冊を手より落したと云ふではないか。死を思ふて煩悶し、死を想ふて失望するのは確かに到着すべき目的の港が判明しないからである世の學者博士にして此の問題に逢着して克く之れを解釋する者、天下一人でもあるであらうか

嗚呼、我は博士である、智者である、哲人であると傲呼するの人にして既に萬里の海洋に乘出しながら出發の港を知らず、到着すべき地點が判らぬ、愚かの極みと云はずして將た何と名付くべき。其の天體を談じ、地質を講じ、法律を饒舌り、經濟を論ずる、恰もこれ船體の構造機關の作用、船長の姓、ボーイの名を知るものと何の擇ぶ所がある。航海者の必らず知らなくてはならぬことは、出發の港と、到着の地點と航海の要件とである。まこと古哲が是等の人を警戒して、大聲一喝『己を知れ』と絶叫したることや。されば己を知るの學問は神を學ぶの學問に次いで最高の學問であつて歴史ありて以來古今の學者賢哲が相競ふて攻究しゝある諸問題の中に、斯程大なる問題は他に又たとないのである。ソハ人は神の無限に比べては殆んど無の如きものなれど、その創造されたる萬物の中に於ては偉大なるを失はない、且小は一個の小宇宙であり、又た一個の小天地であるから、人を攻究することは宇宙を攻究することである。人を攻究することは天（精神界）地（物質界）を攻究することである、何うして是が雲煙過眼輕視すべき問題であらうか。

別れ行く人々

川尻非空

◎時實さんは、善く飲み、善く談する面白い知事さんだつたが、トウ〳〵福岡の市長になつてこの地を去つた。

◎市長には、誂へ向きの人物だらう。役人の古手とはいふものゝ、寸分の吏臭なく非常な讀書家で、骨組は東洋型？、肉づきは立派な新人と來てゐる。福岡のやうな新興都市には、一寸得られない好人材だらう

◎前の市長は、例の立花將軍で、軍人としては大俗といつた面白い風格の人だが、ダイブ盛んに金を使ふたので、年俸一萬圓交際費一萬圓とあつたのを、市會で二千圓（交際費）に削つてしまつた。時實さんは丁度そのあとへ落ちつく譯で、収入の上からは、割のいゝ籤に引き當てたとはいへないかも知れぬ。

◎去るべきの時を知り、選んで善き道についたのが、あの人の凡でないところといふことが出來る。

◎篠田博士の世界一週は、お役目御苦勞と申したい。但し博士のあの明達な文章で歐米巡遊記を書いたら、これは土産として我々の大きいもうけ物だ。御健康を祈る。

◎二月の二十五日の夜、松原さんが大連支店へ立つたが、見送りは盛んなものだつた。赤や紫の連中も相當多く、例の問題の桃葉なども『御機嫌よう』などとやつてゐた。汽笛一聲、する〳〵と車がすべり『左樣なら〳〵』と脫帽してゐる最中、一聲高く『お達者で……』といふものあり。一同驚いて、その人を見れば、釣鐘まんとに、片手を高くさしあげた飯泉さんであつた。

煩悶雜筆

廣江澤次郎

悶々の情

私が『元日氣焔』や『珍談漫筆』を書いたからとて一概に私を元氣者だ、樂天家だと評するは近來甚だ迷惑に存ずる。『招けども來らず善提の喪、追へども去らず煩悶の犬……』と云ふやうな粹な煩悶ではないが私にも理想と現實の不一致に遠因する惱みが私の胸を壓する。

蒼穹に呀え返る月光燦として窓硝子を射込む夜半、萬籟寂として森閑たる丑滿頃、異國旅路の假枕に夢圓かならぬ時など此の事を想ひ出せば胸中悶々の情に堪へず、私は歔欷し只管漢城にて吾兒の成功を期待し給ふ年老へる母に遙にお詫を申上げて置く。畢竟私の煩悶は理想偏重の罪だ！端的に云へば母の現實尊重主義を遵奉出來ず理想に引ずられて行く微力な私が惱みの〻あるのだ。氣の弱き郎人！感傷的の奴さんと笑ひ給ふな、拔山蓋世の英雄すら矢張り人間的惱みがあつた事は史實の示す處ではないか。

理想憧憬

大陸に於て大事業がしたい、時に支那の天地に於て活躍したい。之れが私の希望であり理想だ。此理想に憧憬れ此理想に驀進する私は色々な事業の關係上南北支那に滿洲に西比利亞に日本にと過去十年間能く旅行した、昨年ごろ比較的京城に居たが夫れ迄は三四ヶ月目に京城に歸つた例も乏しからず遂には新聞の人事消息欄に

『廣江澤次郎氏○○より歸城大和町自宅滯在中』

と掲載されるやうになつた、自宅滯在中には私も苦笑するが口の悪い友達はコリヤ名句だ等と揶揄する、斯の如く走馬燈の樣に東奔西走南船北馬したが大正九年以來打續く財界不況に祟られ物質的には收獲頗る尠なかつた、併し成功もあれば失敗もある、此間に私は幾萬金にも替へ難き貴き經驗と智識を得た事は窃に欣快とする處だ

『ナニ金なんか年老いてからでよい、先づ若い内は手腕磨くべし頭腦練るべし見聞廣むべし識見高むべし地盤築くべし交友を天下に求むべし』

等と理想を偏重し物質を輕視したが其通り結果に於て現はれて居る、天二物を與へずとは遺かに名言だと感心する。

母の苦惱

人事を端して天命を俟つ、成敗利鈍は時の運！世の毀譽褒貶は吾不關焉、之れが私の信條だ、理智に富み佛門に深く歸依する母亦之れを理解し共鳴す、此母が

『お前が内に居る時は私が熟睡出來るお前が始終内に居て呉れたら何も云ふ事はないのだが』

と意味深長に云ふて長大息し眼に珠の露を宿し給ふ時には私は胸が一杯に塞かり思はず暗涙に咽ぶ吁！何と云ふ私は親不孝者だろう家庭中心主義は小乘であり理想尊重主義は大乘と勝手に解釋し跳ね廻つた私も顧みて悵然たる久し、理想に殉ずべきか家庭に隨ふべきかは私の胸中を去來する煩悶だ。

愛着の都

母も妻も殊の外京城を愛する、六人の兒女亦孰れも京城にて呱々の聲を揚ぐ、私の宅は翠綠滴る南山麓に位し文錄の役に增田長行の屯したと云ふ曹溪寺山の地續きだ庭後の小丘に登らんか繪の如き京城は一眸の裡に蒐まる、廿一年間住慣れし小京都の觀をなす漢城の天地は私とて愛着の都だ、幸に文明開化聖世の有難さ！京城の自宅に在つて『奉天四十番』と私の奉天事務所に電話をかければ朝八時頃か晩なら三十分位で出て明瞭に通話も出來、又鐵路五百哩も急行で駛れば十八時間四十分で突破する、遠からず飛行機が翔け始めたら勿論奉天京城間日返りが出來る

朝鮮も春風駘蕩し始めたが沼の如き滿洲財界にも春は訪れた、今年からシックリした氣分で活動し私の煩悶も一掃し先輩親友にもご安心を願はう。

◈茶を啜りて

平田久雄

遞信局の津田常男さん、道樂といふと、ひま〳〵に俳句を作ること『一つ御寄稿を』といふと吃驚して『イヤ句に成つてゐるかドウか私自身がマダ解らないので……』

京城雜筆

春興

永樂町人

○

春が來て、あたゝかい雨などが降ると、溫泉場へ行つて見たいやうな氣がする。

○

むかし、一春を別府の不老泉といふ宿に、ゆつくり逗留したことがある。

溫泉場の雨くらゐ、浴客の心を落ちつけるものはない。

浴槽の中で、あれは由布、あれは鶴見と、霧雨のなかに、そばたつ山々を敎へられたが、それは今以て忘れない。

その頃別府は、全市廓內といふやうなところだつたので、晴れたる朝は、鼓の遠音が聞へたり、更け行く雨の夜には、三味のつま彈きなどが聞かれた。

○

不老泉には、泉の流れがとり入れてあつたので、櫻、柳などが散ると、鯉、緋鯉がむれて來て、それを爭ふのであつた。中にはぱん〳〵跳ねあがるのもある。廊下の硝子越にそれを見てゐると、いつの間にか四五の客も加はり、氣がついて見ると、半玉などもまぢつてゐる。別府はそんな樂天地だつた。

○

あれからもう十六七年は經つ。昔の俤が今の別府にあるかどうか

○

毎年時と金とがあつたら、曾遊の別府へ——と思ふが、人間はなか〳〵清閑は得られないのである

○

朝鮮には、柳が多いが、私は殊に柳を好いてゐる。

汽車で通る曠野の中で、一本の柳を見ると、それだけで、春を見たやうに思ふ。

むかし、平壤の江岸には、柳が多かつた。

大同江の水煙、江岸の翠柳、そして帆船の、すゐ〳〵と行くことが、どんなに私たちを喜ばせたか

平壤はむかし秦淮といつたやうな歌舞弦歌の時代もあつたらしい私は春夕江岸の柳に倚るたびに、むかしこゝに蓮步を運んだであらう、春愁を小さい胸にいだいたであらう美くしい妓生の夢を思はざるを得ない。

○

私は櫻は寂しい花だと思ふ。

夕ぐれなどに、そのしら〴〵と立つてる姿を見ると『おゝお前、何を考へてるのだ』と訊きたい。

○

いつか古い寺院を訪ねて、ま新しい木魚を見て、ふと佗しい氣持になつたことがあるが、どうかすると、櫻もそんな氣持がすることがあるのである。

○

桃は野鄙だといふものもあるが、何の苦もなく、春を頌へてゐるところは好い。

黃海道などに行くと、ひと谷みな桃林で、うらゝかな春光に、花氣が蒸れるやうなところもある。

○

おぼろ夜は、春の景情の一つであるが、都大路のそれは、多くの歌人にうたひつくされてゐる。

京城鐘路の街も、おぼろ夜はやはり捨てたものでない。どうかすると、吹管のほのかな調べさへ聞へることもある。

◇朝鮮併合史

石川利夫

○

穗尾東邦氏の『朝鮮併合史』がいよ〳〵三月一日から市に出る筈である。

○

著者は、五六年前から資料の蒐集に苦心し、東京に、京城に、手をつくしてその正確を期したものだ。いよ〳〵筆を下したのは、三年前からで、飽くまで史實を重んじ、記述の精確を期したので、筆路なか〳〵進まず、この正月まで筆を拈して苦吟三昧の容子だつた

○

畢生の著述といふだけに、十分讀みこたへはあるだらう。殊に著者は、長い間の在鮮者、操觚者で、併合當時は、親しく政局を直視した人である。一面からは『政局直視錄』である。

○

內容を見ると、『李朝歷代の政治』から始まつて『李大王の四十餘年』『統監政治』それから『韓國併合』となり。更に『併合後の朝鮮』となつてゐる。紙數凡そ一千ページ、著者半生の心血は、この一卷に注ぎ盡されたかの觀がある。實に尨大なものである。

發行所　朝鮮及滿州社
紙數　一千ページ以上
定價　金十圓（特價八圓半）

この間の近代座を觀て

島田精華

素晴らしい人氣と景氣とに蓋を開けた京劇の近代座一行――京日の後援と云ふ大なる背景に凭れての大成功。記者も本ブラの途次京劇の上景氣に遂々釣り込まれ大枚二圓五十錢と云ふ妻に内證の臺口から二等券を買つて覗いて見た。丁度第二のカルメン劇の最中であつて信子のカルメンが一人で活躍して居る處であつた、記者の目には舞臺の裝置と照明燈の巧妙さには感服の外はない。肝腎の藝術に至つては殆んど取るべきものがない樣に思つた。第三の嬰兒殺し、之れは近代座が代表的の箱入中の箱入で好劇家の御批判を乞ふとまで言明された、社會人情劇であるとのことで、記者も非常なる期待と望みを抱いて二等席の一隅に長時間の幕合も厭はず、待ちわびて居た、軈て幕内の振鈴と共に鈍帳が揚がると上手に駐在所の事務室中央に小山老巡査の住居、下手に勝手元と云ふ搭へ、實に大道具の進歩は今更ながら著るしいものだと思ふと同時に故人斯界の大立物長谷川某をしのばせる。扨て信子の土工おあさは上出來であるが餘り泣き過ぎやしないかの感がある高橋の小山老巡査は京日の評の如く後半より前半の方が遙かに優れて居る、端役ではあるが紙屑買の忠實を賞めて置く、隣の内儀は殊の外不自然で氣障であつた。雜貨屋の小僧、村の百姓共に御苦勞に過ぎぬ、小山老巡査の娘お合のクサビになつて始終觀客に感動を與へて居たのは嬉しかつた。以下高橋お傳劇は唯だその當時の氣分を示して居るのみで先づ氣分劇とでも云ふのであらう。最終の時の氏神は最も無理のない現代世相の半面を諷刺した喜劇で、結構な物であつた。序に一言申度いのは五圓四圓、と云ふ法外の高値にはあきれる。幾ら賣込が高いからとて値打のないものを高値で觀せてあれ丈けの人氣と上景氣は大なる背景とフイルムの賜物である。近代座の諸優、否や信子孃よ朝鮮は良い處であらうがな。

雜筆と寄稿

一、原稿は毎月十日締切ます。
一、しかし成るべく五日頃までに頂いた方が好都合です。
一、出來るなら一頁以内にお書き下さい。
一、御名前を出すことの出來ぬ原稿は、お載せいたし兼ねます。
一、お願ひした時は、どうか努めて御執筆下さい。お願せずとも、お心づきのことはどうかお書き下さい。
一、雜筆は事實上寄稿家及び讀者の共有物であります。

編輯後記

一記者

◎時實知事の讀者に對する『お別れの辭』は、來月號に福岡から寄せらるゝことになつてゐる。
◎久原の小龍さんが、健康恢復、再び本紙に筆を執られるやうになつたのはうれしい。
◎裡里の佐々木さんも、久々に稿を寄せられた。これはマダ引續いて『湖南雜記』があるものと思つてゐる。

細工の御用は本町徳力へ
電本三九三九
京城 徳
金銀白金
地金ノ御用ノ
京城明治町
徳力本店出張所
電本二〇八八 五七二

大正十五年三月廿八日印刷
大正十五年四月一日發行
一部定價金四十五錢
京城府和泉町一六四
發行兼編輯人 松本武正
印刷人 石川利夫
印刷所 京城日報社
京城府和泉町一六四
發行所 京城雜筆社
電話光化門三〇六

頭の先より足の先まで

と云ふ趣意にて洋裝に必要な附屬雜貨部を開設致しました、實用向から高級品迄ズット取揃へ、確かな品を極めて薄利で御便利に御提供申します、何卒『丁子屋の洋服』同樣御評判の程御願申上げます。

▲雜貨部品目

帽子、ワイシヤツ、カラー、ネクタイ、ボタン類
メリヤス、セーター、沓下、手袋、首卷、ズボン
ツリ、ハンカチーフ、小供セータ、下着類

毛布新着

有名なロシア毛布各種、旅行用として最も妙
日本毛織特製茶毛布各種、寢具用として必需品

京城南大門通り

丁子屋洋服店

電話本局 長二四六三 二二九七 三〇九〇一 番

休日無し毎日夜九時迄營業
御用の節は店内雜貨部御呼出被下度
市内は御一報次第現品持參貴覽に供し申候

均質牛乳

牛乳界の大革命

日本最初の試み

均質牛乳の特徴は

脂肪を粉碎して居ります故に消化が宜しく風味の佳良と獸臭のない事は一度召上つた方には直覺せられます長らく腐敗しませぬから小兒や病人の方々にはこの均質牛乳に限ります品質本位でありますから値段の競爭をせないのは弊場の主義生命であります。

朝鮮總督府病院特定御用
陸軍衞戍病院御用
京城府内各病院御用

平山牧場

電話光化門一三三番
京城東小門外

官製食卓鹽
電機諸機械
コンヂットチユーブ
ラヂオ

御用の
幣店へ御下命
願上ます

京城南大門通三丁目
富田商會
長電本三三〇九

◎銘仙と
毛糸◎

ちゝ姫や

堀内滿輔

電話本局
八五五番
九〇〇番
〇六五番

◎多少に拘らず御用命
の程を願ひ上げます

野に山に遊ぶべき日は來りぬ

サッポロビール
エビスビール
アサヒビール

ほのかなる醉心地を知り玉へ

旅客の福音　千哩券發賣

旅行季節と千哩券の利用

商用旅行其他常時屢々當鐵道を御旅行せらるゝ御方は德用な此千哩券を御利用せらるゝ事を奬契め致します

何處の驛でも任意に乘車券と引換し得る事の便利と濟經的であることが此の哩券の特點であります

千哩券　一册（廿五哩分券四十枚綴）

料金　二、三等は普通運賃の二割引

一等　六十三圓
二等　三十六圓
三等　二十圓

其他旅行上の御相談は左記に御承合下さい

日程の作成、案内記等贈呈致します

朝鮮總督府鐵道局

釜山、大田、京城、平壤　運輸事務所
東京、大阪、下關　鮮滿案内所

京城雜筆（第八十六號）

大正十三年一月二十九日第三種郵便物認可
大正十五年四月一日發行（毎月一回一日發行）